

林謙三の古琴研究と

高羅佩 (Robert Hans van Gulik) ・ 查阜西らとの交流について

山寺(小野)美紀子

はじめに

東洋音楽学者の林謙三(本姓長屋、号は積風、一八九九〜一九七六)は、日本に伝存する雅楽の演奏伝承や楽書、古楽譜、及び正倉院の樂器を中心とした古樂器等の調査・解読・復元を行い、且つ中国を始めとする東アジアの資料を渉獵して、日本と中国の古代音楽の樂曲・樂理・樂器を実証的に解明したことで知られる人である。主な著作には、『隋唐燕樂調研究』(上海、商務印書館、一九三六年)、『明樂八調研究』(上海、音楽出版社、一九五七年)、『敦煌琵琶譜的解読研究』(上海、音楽出版社、一九五七年)、『東亜樂器考』(北京、音楽出版社、一九六二年)、『正倉院樂器の研究』(東京、風間書房、一九六四年)、『雅樂——古樂譜の解読』(東京、音楽之友社、一九六九年)、『東アジア樂器考』(東京、カワイ樂譜、一九七三年)等がある。中国で出版された著書が多く、今日でも、東アジア古代音楽を研究する国内外の学者たちから広く尊敬されている。その一方で、彫塑家でもあり、勤務した奈良学芸大学では主に彫塑を教えていた。

筆者は、二〇一四年から林謙三ご子息の長屋糺氏宅で、林謙三の遺稿や旧蔵資料の調査・整理に携わる機会に恵まれたが、その過程で、林が戦前の早い時期から古琴に関する調査研究を行っており、未発表の草稿も存すること、またこの分野をめぐって海外の著名な学者——オラ

ンダの Robert Hans van Gulik (高羅佩) や中国の査阜西ら——との交流があったことを知った。しかし、それらの出来事は全くと言ってよいほど知られていないため、詳しく紹介したいと思い、本稿で報告する次第である。

さて本論に入る前に、ここで古琴について解説を加えておく。古琴は中国の楽器であり、紀元前から、君子の修養のための楽器、あるいは隠者の自娛のための楽器、更には文人の教養として嗜むべき「琴棋書画」の筆頭として、儒者を始めとする知識人に尊重かつ愛好されてきた楽器である。元来、この楽器は単に「琴」と称されてきたが、絃数が七本であることから「七絃琴」「七弦琴」とも称し、近代以降には「古琴」(guzhen) と呼ばれるようになった。よって本稿では、古琴のことを文脈により「七絃琴」と称したり、あるいは「琴」とのみ表記するが、これらは全て古琴を指すことに留意されたい。なお、琴の音楽「琴楽」は、付随する思想や学問等を含めて「琴学」または「琴道」とも称し、琴を嗜む者を「琴家」や「琴人」、あるいは日本では「琴士」などと呼ぶが、その多くは職業としての演奏家ではなく、自己の修養や楽しみとして弾琴する者がほとんどである。

琴は、奈良時代には日本に伝えられていたことが認められる。そこで、本稿でも後で何度か言及するが、正倉院の楽器の中には「金銀平文琴」という装飾が施された七絃琴一張が現存し、法隆寺にも唐代の作と言われる七絃琴一張が伝存した(現在は東京国立博物館所蔵)。また、琴の最古の楽譜は中国ではなく日本に残っており、現在東京国立博物館所蔵の唐代写本『碣石調幽蘭第五』(以下『幽蘭』と略記)がそれである。ただし、平安時代末期には七絃琴の演奏伝承はほぼ途絶えたとされる。その後、明末清初の中国から渡来した東臯心越禪師(一六三九〜一六九五)が日本で弾琴を教え、広く相伝されたことから、江戸時代には多くの儒者・漢学者・文人らが琴を嗜んだことが知られる。しかし、明治・大正期に琴楽ないし琴学は衰退の一途を辿り、後述するように、林謙三が琴の調査を行っていた時期には、東臯心越を祖とする琴系統の琴士がただ一人となっており、しかも林は、その最後の琴士が亡くなって、江戸期から続いた琴の伝承が完全に断絶する時に居合わせたのであった。

林謙三は、このような重要な時期に琴の調査研究を行っていたのであるが、琴を主題とした論文は、一九四二年に『東洋音楽研究』第二巻第四号に発表した「琴書三題」のみであり、他は、『東亜楽器考』、『東アジア楽器考』、『正倉院楽器の研究』等の著書の中に、琴に関する短い論考を載せたのみである。その後、林謙三逝去後に、同じく東洋音楽学者で林の研究仲間であった岸辺成雄(一九二二〜二〇〇五)、及び稗田浩雄(一九四五〜)、坂田進一(一九四七〜二〇二二)らが、日本の琴に関する調査研究を進め、江戸期の琴学史と琴士の系統について

は相当多くのことが明らかになった。⁽¹⁾そして今日では、古琴の研究と演奏をめぐる国際的な交流、特に本場中国との交流も活発になり、日本で古琴を嗜む者も増えつつある。しかしながら、かつて林謙三が古琴をめぐる行った調査研究と交流、またそれによって残した貢献については、右の論文「琴書三題」の他は、全く知られていないというのが現状である。

以下、本論では、林謙三の遺稿や旧蔵資料の調査によって明らかになった、彼の古琴に関する研究等の軌跡と、海外の研究者との古琴をめぐる交流について、時系列で辿りながら紹介する。

一、高羅佩との交流——一九四〇年に「大雅」琴と琴譜『集義齋私譜』を贈られ弾琴を学ぶ——

林謙三の琴に関する調査研究と弾琴の実践は、戦前から始まった。林が弾琴を学んだのは、オランダの外交官ヴァン・グーリック (Robert Hans van Gulik) 日本語片仮名表記ではファン・フリーリックまたはヒューリックなども⁽²⁾。一九一〇〜一九六七) からであった。グーリックは、中国語・日本語を含む多言語に通じ、中国詩文・日本文を作り、毛筆・篆刻を能くし、専門書を数多く残した東洋学者でもあり、更には探偵小説作家としても知られる人である。中国名は「高羅佩」、書齋名は集義齋、中和琴室、号は笑忘などであり、⁽³⁾林謙三との交流ではこの中国名を用いていたことから、本稿では以下、高羅佩と称することとする。

高羅佩は、一九三五年に東京のオランダ公使館の書記官として来日したが、日本赴任中の一九三六年の秋には中国北京に滞在し、もと清朝の高官で中華民国成立以後は琴家として知られた葉詩夢 (一八六三〜一九三七) から、古琴の演奏を学んだ⁽⁴⁾。高羅佩はまた、日本において琴の資料を収集・調査し、当時知る人も少なくなっていた日本の琴学史、特に東臯心越を祖とする琴の系統に関する知見を述べた論文「Chinese Literary Music and its Introduction into Japan」を一九三七年に発表した。更に、一九四〇年には琴学の総合的な研究書『琴道 The Lore of the Chinese Lute』を上智大学から出版し、翌年にも同じく上智大学から、嵇康著『琴賦』の訳注である『HSI KANG and his Poetical Essay on the Lute』を公刊して⁽⁵⁾。

林謙三は、年譜によると、一九四〇年の五月頃からおそらく一年ほど、高羅佩から琴の演奏を学んだとみられる。⁽⁶⁾注目されるのは、その際、高羅佩は先に、自身が所有する楽器と、自ら書写した楽譜を林謙三に贈って、琴の演奏を教えたということである。これらの史実は、林

のいくつかの旧蔵資料から、今回初めて明らかになったことであるが、例えば、その約三十年後、高羅佩が亡くなった後に林が執筆した未完原稿「高羅佩 van Gulik と琴の思い出」には、次のような出来事が述べられている。

昨年九月、故国で亡くなられた駐日オランダ大使のファン・ヒューリック（漢名、高羅佩）博士は博識多芸で能書家で篆刻や漢文に巧みであったが、琴学——七絃琴の音楽のこと——にも通じておられた。これらは文人のたしなみとしての余技であった。もう三〇年ほど前のことであるが、私に琴を学べと明代の琴の裏に贈与の辞を刻したものを届け、弾琴の手ほどきを示された。前から琴に心がけて道具屋から付属品のない琴を求めたり、琴譜を集めたりしていたものの、とうてい独習はむりとあきらめかけていた頃とて、この良師をえてにわかには琴学に熱中したものである。⁽⁷⁾

高羅佩が林謙三に贈った琴とは、林が残したメモ等によると、日本の江戸期天明八年（一七八八）造の琴であり、高羅佩はこの琴に自ら「大雅」という銘を付けて刻した上で、次のような銘文まで記して、贈ってくれたという。⁽⁸⁾

西紀一九三七年丁丑之歲、余遊西都、偶獲此琴、天明之物也、寸尺甚大、其音殷々、如春雷、因以大雅名之、藏之三年、自恨不知音、公餘拂綠綺之絃、輯覆韻之文、差堪自娛、而不足以問世、名琴藏於櫝、曷如懸于高士之堂、夙知林友積風、遂于聖樂、長于彫刻、信是斯文巨子、藝林高士、因欣然贈以此琴、俾斯道永錦（續カ）中於大和上爾、

庚辰夾鐘、和蘭國笑忘高羅佩、識於中和琴室

（西暦一九三七年に、私は京都に旅し、偶然この琴を手に入れた。江戸期天明年間に造られたものである。長さ形が非常に大きく、その音はとどろくように大きく、春の雷のようであった。そこで、私はこの琴に「大雅」と名付けた。これを蔵すること三年、残念なことに私は音楽をよく理解できないので、公務の余暇に、琴の絃をつま弾き、琴についての駄文をものしたりして、いささか自分を楽しませる程度で、世に問うほどではなかった。名琴はしまっておくより、高潔の士の堂に掛けておく方が良いであろう。早くからの友人である林積風謙三は、聖樂に精通し、彫刻にも長けており、まことその道の権威、芸術の高士である。そこで喜んで彼にこの大雅琴を贈り、この

道を大和の国にてとこしえに長らえさせようとするのである。

一九四〇年二月 オランダ国 笑忘 高羅佩 中和琴室にて識す。⁽⁹⁾

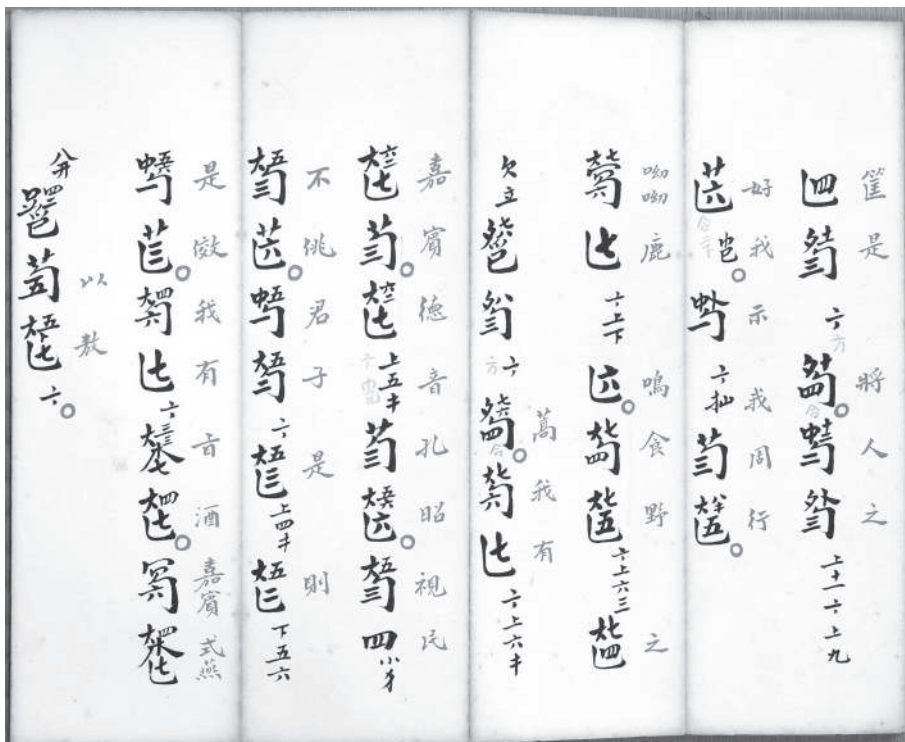
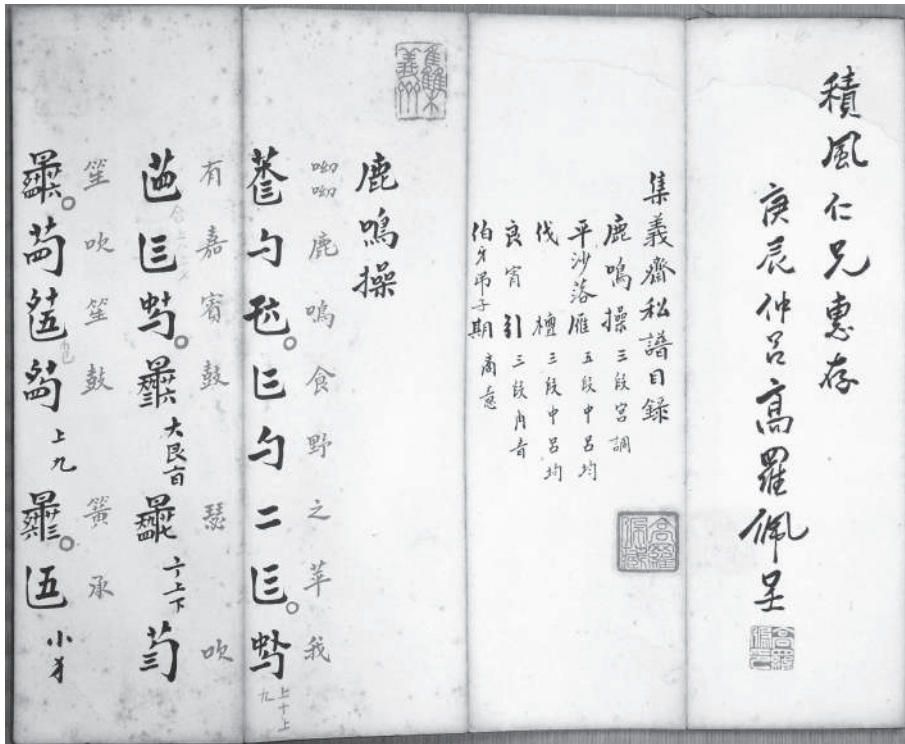
この「大雅」琴は、残念なことに、五年後、戦火に遭って焼亡してしまったという。⁽¹⁰⁾

ただし特筆すべきことに、高羅佩が当時自ら手写して林謙三に贈ったものとみられる琴の楽譜の方は、今もなお残されていたのである。それは、高羅佩の書齋名を冠した『集義齋私譜』と題する折本三冊(甲・乙・丙)である。

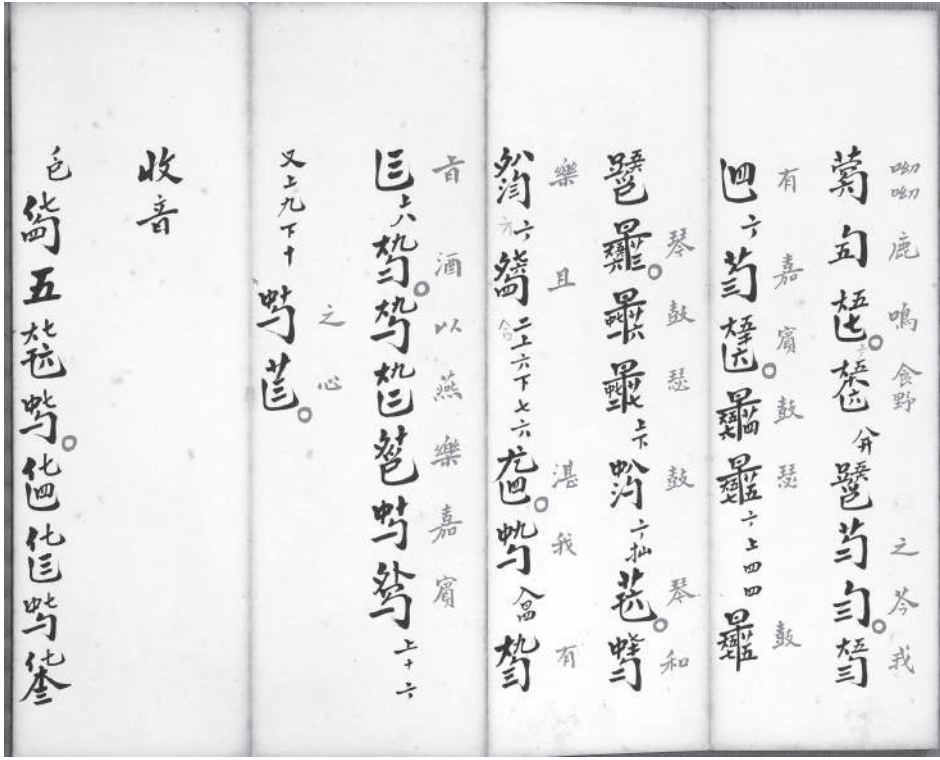
図1に『集義齋私譜』全三冊のうちの甲冊の写真を載せたが、その巻頭には、「積風仁兄惠存／庚辰仲呂 高羅佩呈」(／は改行。以下同)と記されているのが確認できる。また、全冊にわたって各所に高羅佩の印「笑忘」「高羅佩印」「高羅佩蔵」「集義齋」が幾つも捺してあり、筆跡は明らかに高羅佩のものである。積風は林謙三の号で、庚辰仲呂は一九四〇年四月であることから、これは、一九四〇年に高羅佩が林謙三のために書写して贈ったものとみられる。高羅佩は弾琴を教授する際、前述の「大雅」琴のみならず、自筆の琴譜『集義齋私譜』までも、林謙三に贈っていたことが知られよう。

ところで、琴の楽譜というのは、漢字を略した符号などで構成された譜字(減字)と称する)で表記されるもので、それは減字譜と呼ばれる。高羅佩は、かつて自身の論文の中で、「琴字(引用者注、琴の減字)ヲ美シク書クノハ大變面倒ナ事デアル」と述べていたもの⁽¹¹⁾、林謙三に与えたこの『集義齋私譜』では、全部で八曲もの減字譜が、全冊最後まで美しく丹念に書写してあり、歌詞と句点も朱筆で丁寧^マに記してある。高羅佩の林謙三に対する敬意や真心が窺えよう。全三冊に収載された譜の曲目は、「鹿鳴操」(三段 宮調)、^マ「平沙落雁」(五段 中呂均音調)、^マ「伐檀」(三段 中呂均音角)、^マ「良宵引」(三段 角音)、^マ「伯牙弔子期」(商意)、^マ「高山」(八段 中呂均音角)、^マ「風入松」^マ、「秋塞吟」(三段)である。これらの譜のうち、どの曲を高羅佩が林謙三に教えたのか、あるいは全曲を教えたのか、その詳細は不明であるが、曲目から想像するに、入門的な手ほどぎのみではなく、ある程度本格的に弾琴の教授が行われたと思われる。

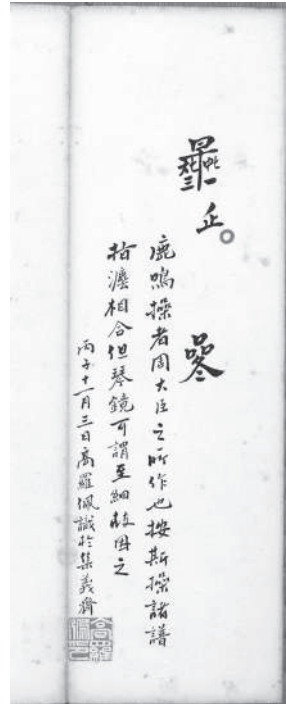
図1：林謙三旧蔵、高羅佩自筆『集義齋私譜』（全三冊）の甲冊（巻頭～「鹿鳴操」の部分、及び表紙）



※図1の続き



林謙三の古琴研究と高羅佩 (Robert Hans van Gulik) · 查阜西らとの交流について



二、琴に関する資料の収集と調査、論考の執筆、及び作曲と編曲（一九四五年以前）

一九四〇年から高羅佩に弾琴を習い始めた林謙三は、「この良師をえてにわかに琴学に熱中し」、早くも一九四二年には論文「琴書三題」を発表した。この論文は、本稿の「はじめに」ですでに述べたように、琴を主題として取り上げた林謙三の学術論文としては、唯一のものである。ただし、本論文の冒頭には、「余は近頃七絃琴にいさゝかの興味あるにまかせ、古琴漫筆凡そ十篇を作つた。今そのうち琴書に關するもの三篇を擇んで本誌に寄稿する。」とあるように、彼の琴に關する研究は、本論文に止まるものではなかつたことが窺える。その研究の全貌については、林謙三が一九四五年の空襲で所蔵資料の大部分を焼失したことから、多くを知ることとは不可能ではあるが、辛うじて現存する資料に基づいて、以下、戦前の一九四五年までに林が琴に關して行つた事項を挙げ、その軌跡を追つてみることにする。

(一) 最古の琴の楽譜『幽蘭』に關する資料収集と研究

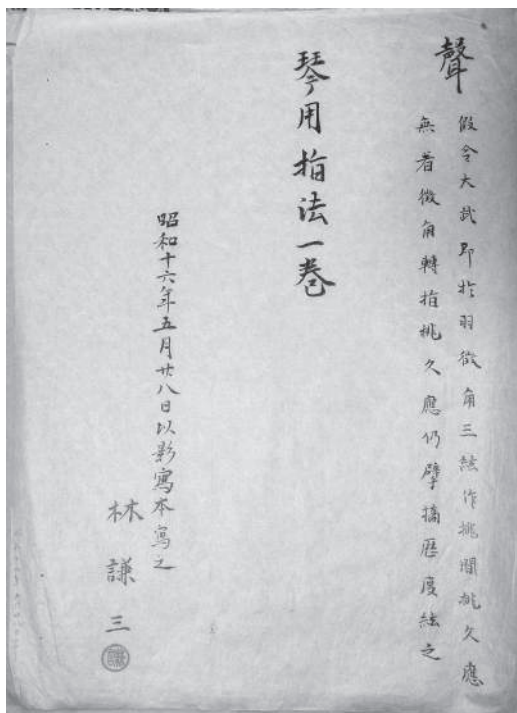
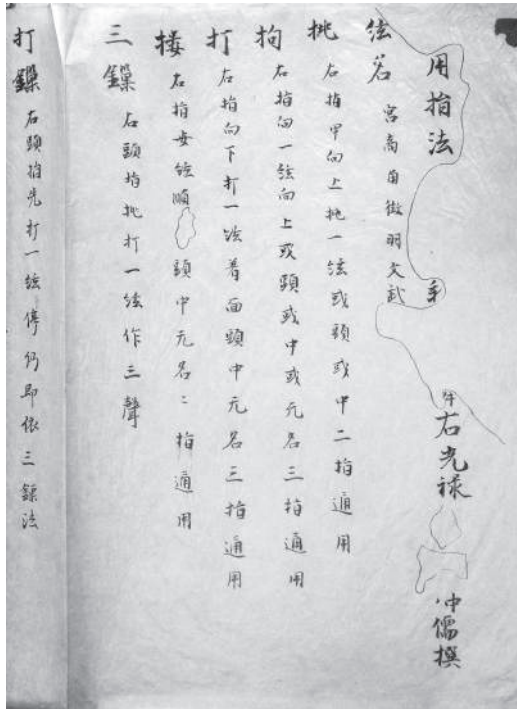
本稿の「はじめに」で前述したとおり、最古の琴の楽譜『幽蘭』は、琴の本場である中国ではなく日本に伝存する。この琴譜は、中国の六世紀末頃に演奏・伝承されていたという琴曲「幽蘭」を、現行の記譜法である減字譜ではなく、その源流とみられるすでに失伝した記譜法（文字譜と呼ばれる）で記したものである。林謙三は幼少の頃、当時京都の神光院に所蔵されていた『幽蘭』をすでに見たことがあり、後に高羅佩から弾琴を習つた際に、まず着手したのが、『幽蘭』に關する資料収集とその研究であつた。⁽¹⁴⁾

なお『幽蘭』の解説研究は、最初に日本江戸期の儒者荻生徂徠（一六六六―一七二八）が行つたことが知られる。徂徠は、当時楽家の伯氏が所蔵していた『幽蘭』及び琴の古指法書『琴用指法』（『琴手法書』などとも称される）を借覽して、研究を行つた。⁽¹⁵⁾一方、中国では、『幽蘭』の影写本が、一八八四年刊行の『古逸叢書』に収録されて、その存在が知られるようになった後、琴家の楊宗稷（一八六五―一九三三）が最初に『幽蘭』の解説研究を行い、その成果は彼の『琴学叢書』にて公刊された。⁽¹⁶⁾

さて、林謙三旧蔵資料に基づくと、『幽蘭』に關して林謙三が行つたと知られる事項には、以下のものがある。

○一九四〇年十月 楊宗稷の『琴学叢書』から、『幽蘭』解説研究の成果を記した部分（「幽蘭古指法解」「幽蘭減字譜」「幽蘭双行譜」「幽蘭

図2：吉川英史所蔵『琴用指法』影写本の林謙三手
写本（巻頭 [上]・巻末 [下]）



和声)を書写する⁽¹⁷⁾。

○一九四〇年十月二十八日 徂徠による『幽蘭』解読研究の所産の一つとして写本で流布した荻生徂徠編著『幽蘭譜 附琴左右手法・琴手法図・調琴法』のうち、『琴用指法』を用いて徂徠がまとめた「琴左右手法」以下の部分を書写する。また、徂徠の他の著作から、『幽蘭』と『琴用指法』に関する著述を抜き書きする⁽¹⁸⁾。これとは別に、また荻生徂徠編著『幽蘭譜 附琴左右手法・琴手法図・調琴法』の江戸期写本一本を入手し、「琴左右手法」以下の部分に校正書入作業を行う（時期不詳⁽¹⁹⁾）。

○楊宗稷の解読における調絃法と荻生徂徠編著『幽蘭譜 附琴左右手法・琴手法図・調琴法』の「調琴法」に見える調絃法を比較分析する（時期不詳⁽²⁰⁾）。

○一九四一年五月二十八日 当時『琴用指法』原本の行方は不明であったが⁽²¹⁾、その影写本を日本音楽学者の吉川英史（英士とも、一九〇九～二〇〇六）の蔵書中から見出し、これを模写する⁽²²⁾（図2参照）。

○江戸期の琴家である幸田親盈（子泉、一六九二～一七五八）較正『幽蘭譜字母源流』（『幽蘭』の譜に見える指法用語を挙げて解説等を加えたもの）を書写する（時期不詳）⁽²³⁾。

○一九四一年八月十四日『幽蘭』についての言及が見える江戸期写本『長谷川生問答』を書写する⁽²⁴⁾。

（二）琴に関する日本の資料（文献・楽譜・楽器）の収集

一九四〇年十一月に出版された高羅佩の著作『琴道 The Lore of the Chinese Lute』中の附録四「The Chinese Lute in Japan」は、日本における琴学史について述べたものである。当時の日本では、弾琴する者はすでに数人にまで激減しており、⁽²⁵⁾ 琴学が断絶する一歩手前の時期であったが、高羅佩は日本で琴の資料を集め、特に江戸期における琴学系統の解明を進めて、右の著作の附録四をまとめたのであった。林謙三は論文「琴書三題」において、この高羅佩の著作を紹介し、その研究を非常に高く評価した上で、「琴家の傳を調べる仕事は氏も断つてゐるやうにまだ未だ未完成で資料が更に更に集められねばならない。その資料には刊本以外の諸記録・寫本・琴銘等とがあるが、これを集成することだけでも容易ならぬ仕事で到底一人の爲し能ふところではない。余が最近獲た幕末の琴士井上竹逸の「隨見筆録」（弘化・嘉永の書で、琴に關する先人の書を筆記したもの。かつて中根淑はこの書に基いて「七絃琴の傳來」（香亭遺文）を書いた。）などはこの師傳の相承に關し相當豊富な未知の資料を提供して呉れるが、このやうな資料がまだ何處に潜んでゐるのか分らないのが現状である。かやうなものを次第に集めて立派な琴系譜を作るのも余等に殘された仕事の一つであらう⁽²⁶⁾。」と述べている。この言葉のとおり、林自身も、日本に殘る琴の資料の収集と調査に取り組んだことが、林謙三旧蔵資料から窺える。以下に挙げるのとおりである。

○一九四一年二月二日 幽学莊舎蒐集古写本から江戸期の琴学の書『絲桐説約』（著者不詳）とこれに附載する多紀藍溪（元徳、一七三二～一八〇一）著『琴壇雜載』を書写する⁽²⁷⁾。

○一九四一年二月三日 井上竹逸（一八一四～一八八六）筆記の『隨見筆録』（写本一冊）を購入し、（右に引用した「琴書三題」で述べているように）この書によって、東臯心越を祖とする琴学の師傳の相承について多くの知見を得た⁽²⁸⁾。また、時期は不明であるが、井上竹逸の識語と校正書入のある『琴譜新声』写本一冊も入手している⁽²⁹⁾。

○一九四一年四月二十四日 題簽に「幽蘭譜」と記す琴譜一冊(幕末～明治の写本)を購入する。その内容が『幽蘭』とは関係のない、享保・元文年間に琴家小野田東川(一六八四～一七六三)と楽人狛近任(一六七六～一七五七)が携わった日本雅楽の唐楽の琴譜を伝写したものであることに気付き、改めて「唐楽琴譜」と名付け、内容について校正書入作業を行う⁽³⁰⁾。

○一九四一年八月九日 画家で琴士の浦上玉堂(一七四五～一八二〇)著『玉堂雜記』(刊行年不詳)の帝国図書館所蔵今泉雄作(一八五〇～一九三二)手沢本を書写する⁽³¹⁾。また、同年あるいは翌年に『玉堂琴譜』(天明三年序、寛政三年刊)の刊本一本を抄写し、解読・分析を行う⁽³²⁾。

○一九四一年十一月七日 自身が所持する『東臯琴譜』⁽³³⁾の写本一冊に対し、別系統の『東臯琴譜』(服部晦庵旧蔵琴譜)を用いて校合書入作業を行う。また、同服部本から「宮音高山」の琴譜を書写する⁽³⁴⁾。

○医家で琴士の鈴木蘭園(一七四一～一七九〇)著『雷琴記』(唐代の開元年間に著名な斲琴家である雷氏が製作したものと云われる、法隆寺伝存の琴について著したもの)の写本を入手し、翻字する(時期不詳)⁽³⁵⁾。

○一九四三年五月二十八～六月一日 雅楽研究者で友人の平出久雄(一九〇四～一九八四)と共に、当時三菱倉庫にあった紀州徳川家所蔵樂器の調査を行い、同家所蔵の琴「谷響」「冠古」の拓本を採る。また、自身が蔵していた今泉雄作旧蔵の明琴(中国明代の琴)の拓も採る⁽³⁶⁾。

以上、現存する林謙三旧蔵資料に基づいて、戦前までに林謙三が行ったとみられる事項を挙げてみた。琴に関する多くの資料を集めて調査・考察していたことが知られよう。ただし、実際は更に多くのものを収集していたと考えられる。というのも、一九四二年の論文「琴書三題」の末尾には「日本撰琴学書目略」が附してあり、これは林が得た資料の書目と考えられるが、その中には、右に挙げた琴書以外のものも数点含まれているからである。おそらくそれらは戦火で焼けてしまったのではないかと想像する。「林謙三先生年譜・業績目録」の昭和二十年(一九四五)の項には、「四月二三日 空襲。一四日未明、西ヶ原の家焼失し、樂器、図書など概ね空し⁽³⁷⁾。」とある。なお、右の事項の最後に挙げた今泉雄作旧蔵の明琴も、その現存が確認できないことから、この時に焼失してしまったのではないかと思われる。

(三) 論考の執筆

林謙三が戦前に執筆した琴に関する論考については、既刊の「琴書三題」の他にも二点あったことが確認できたので、ここに紹介する。

1 『国史辞典』(富山房)の「琴(きん)」の項目

富山房の『国史辞典』全八巻は一九四〇年から順次第四巻までが発行されたが、戦後出版が中断した。そのうち一九四二年二月発行の第三巻に見える「琴(きん)」の項目は、林謙三が執筆したものであった。公刊されたものではあるが、理由は不明ながら、「林謙三先生年譜・業績目録」にも本人の自筆年譜にも、この執筆については載せておらず、おそらくほぼ知られていない業績であると思われる。よって、ここに、長文ではあるが全文を載せて紹介する。

きん 琴きん 七絃の樂器。伏羲伏羲・神農神農、或は炎帝炎帝の作るところといふ傳説をもつ起原の古い樂器で、恐らくその原始形は板に絃數條を張つて鳴らしたものであらう。絃數は初め五絃あり、堯堯、又、一説に周代に文王がこれに二絃を加へたといひ、或は武王・文王が各一絃を増して七絃とした古といふ附會説がある。その他絃數、大きさ等に關して種々の異説があるが七絃、三尺六寸六分を準とし、後世小は三尺一二寸より大は四尺有餘まで種々のものを生じた。その構造は面を桐、背を梓の二枚で造るといふのが式で、その上に鹿角灰等を塗り、研磨の後、漆で仕上げるものである。琴面には螺蛤で造つた徽(暉)十三を嵌入し、絃の音律の目安としてゐる。この徽は恐らく十二律説の完成以後の發明であらう。十三徽の絃に於ける位置は左の如くである。

三十一	二十九	八	七	六	五	四	三	二	一			
7/8	5/6	4/5	3/4	2/3	3/5	1/2	2/5	1/3	1/4	1/5	1/6	1/8

琴の面背の漆は多年月の経過によつて一種の斷紋を生ずるもので、これに蛇腹斷・牛毛斷・梅花斷等の名がある。梅花斷は千年を要するといはれ最も賞美されるところである。七條の絃の名は宮・商・角・徵・羽・文宮・武商で、絃は古來壓絲を最良とし尚書、蜀・秦・

江淮の蠶絲これに次ぐといはれてゐる。次に琴の調絃は上古以來幾變遷を重ねたらしく、漢代の制は史記樂書に「絃大者爲宮、而居中央宮也、商張右傍、其餘大小相次、不_レ失其次序、則君臣之位正矣」とあるにより、やゝ窺ふに足るが、後世はこれと異なり第一絃より濁清の順に排列し、隨て絃の大小もこれに比例してゐる。しかして七絃の散聲律は凡そ五聲本位のもの七聲本位のもの二様あるが近代の琴書には専ら五聲しか説いてゐない。周漢の古制も恐らく五聲本位であつたらう。その奏法は太古は一絃一音を弾じたものに相違なく、漸く一絃多音に變じて、徽を必要とするに至り、次第に複雑なる手法を考案するやうになつたものであらう。蔡邕の琴賦中「左手抑揚、右手徘徊」「屈伸低昂、十指如_レ雨」の語を通じて、漢代已に左右の手法が相當に發達してゐたことを想像し得る。なほ今傳へられてゐる手法は唐代のものと大差はないらしく、近代の考案になる琴専用の複雑なる減字譜が教へるやうに甚だ技巧的である。琴は古來雅樂の冠として頗る尊ばれ、支那歴代の雅樂の合奏には必ず用ひられ、又、君子の坐右から離すことのできない修身正心の具として大に推奨された。「琴者禁也、所_下以禁_二止淫邪、正_中人心_上也_{（白虎通）}」といふ觀方がこれで、後世この思想は次第に發展し、儒・佛・道の思想を包括して琴の旨とするところに關し、自ら一つの學説を形成した。これを琴道と稱する。斯道に於ては彈琴そのことよりも琴趣を知ることが第一義とした、めに、文人には喜ばれたが、俗人には頗る縁遠きものとなるを免れず、今日の衰頽を見るに至つたのである。我國に於ける沿革を顧みるに、この樂器は飛鳥時代に已に知られてゐたらしい。當時の記録・遺品こそないが、工藝品に現れたもの、例へば御物纏佛殘缺等によつて少くとも琴の知識のあつたことを知る。次で奈良時代では、その實用の疑ひないことは唐より舶載の御物開元琴や、大安寺資財帳（天平十一年）に「合雜琴貳拾伍面（中略）琴（四面並佛物）」、東大寺獻物帳に「銀平交琴一張、漆琴一張」、阿彌陀院寶物目錄（神護景雲元年）に「琴一面」の記載あるにより推察することができる。又、平安時代では貴顯の間に相當流行したものでらしく、嵯峨天皇・仁明天皇・文德天皇もこれを愛玩し給ひ、當時文室麻呂は初め嵯峨天皇より親しく教を受け、後、琴師の稱を得た程の名手であつたといふ（三代實錄貞觀六年二月）。次で延喜より天曆の頃には御遊に琴（こと）の獨奏乃至和琴・箏等と合奏の事度々あり、西宮記・御遊抄・源氏物語（帯木・紅葉集、花宴・須磨・松風）にも屢々、彈琴の事を記してゐる。日本國見在書目錄に出づる琴經（蔡伯）・琴操（孔）・琴法（趙耶）・琴錄・琴德譜・琴用手法・雜琴譜・彈琴用手法・雅琴錄や、今も存する幽蘭譜等の琴書は奈良時代から平安時代にかけて將來されたのであらう。かく一時流行した琴も平安時代後半期には急速に衰頽したらしく、源經信（德承元年）の在世中は尙ありし琴曲がその後絶えたのを惜しみ、南都の圓憲（和名と殆ど同）が鎮西に赴いて宋人より傳習したが、その後また傳へる者が無いといふ（體源）。これはともかくとし、殘夜抄や塵袋等鎌倉時代の著書には琴の絶えたるを記してゐるから、先づ平安時代を限りとし

て断絶したと見てよい。その後久しく琴のことを聞かず、琴といへば箏の別名の如く考へられてゐたが、近世、明の歸化僧心越(東華律師)により琴學再興の氣運に恵まれた。心越は延寶年中長崎に來り、後、水戸光圀に招かれ江戸に住し琴學を教授したが、次第に文人雅客の間に弘通し、やがて寛政・文化の頃の全盛期を迎へるに至つたのである。杉浦琴山(琴山)の東臯琴譜、荻生徂徠の琴學大意抄、浦上玉堂の玉堂琴譜等の琴書は心越以來のわが琴學隆盛の一面を示すものである。ところが明治年代以後再び衰へ、今日では彈琴家の數は實に寥寥、辛うじて餘喘を保つに過ぎない。近年蘭人高羅佩(ヴァンクリッヅ)が琴學の復興を提唱してゐるのが纔に目立つのみである。(林謙三)³⁸⁾

2 未発表原稿「七絃琴雜記」

本稿の本章冒頭ですでに述べたとおり、林謙三の「琴書三題」は、本来「古琴漫筆凡そ十篇」から「琴書に關するもの三篇」を選んで寄稿したものであったという。残りの七篇の内容は不明であるが、林謙三旧蔵資料の調査において、「七絃琴雜記」と題し、その表紙の裏に「古琴漫筆」と記す別紙が裏打ちされた未発表原稿が見つかったので、これについても紹介したい。

この原稿は、一九四二年に富山房から刊行予定であったが、終戦直後の一九四五年に出版取りやめとなつた『東亜樂器考』の手稿と校正紙の中に含まれていたものである。詳しくは、林謙三著、山寺三知解題・翻刻・校訂「七絃琴雜記 附、招提寺東塔遺材の琴」(『國學院大學北海道短期大学部紀要』第四十一卷、二〇二四年)に解題と全文を載せているので、そちらを参照されたい。ここでは、「七絃琴雜記」の各篇小題のみ挙げておく。

①琴制の發達 ②琴案 ③『幽蘭琴譜』 ④『玉堂琴譜』 ⑤徂徠と琴學 ⑥『琴道』高羅佩著
全部で六篇あり、「古琴漫筆凡そ十篇」には足りないが、この原稿の存在によつて、林謙三が戦前の早い時期から、琴に關する様々な視点からの論考を執筆していたことが窺えよう。なお、右の③④⑥は「琴書三題」に重なる内容である。

(四) 琴曲の編曲と作曲

林謙三は琴の研究のみならず、琴曲の編曲や作曲も行つていたことが、このたびの調査で明らかになった。その旧蔵資料中に、林が自ら編曲あるいは作曲した琴の樂譜二点が見つかったからである。二点とも「琴譜／＼、數詞(正調)／＼、無題(正調)」と題した袋に入っており、「數

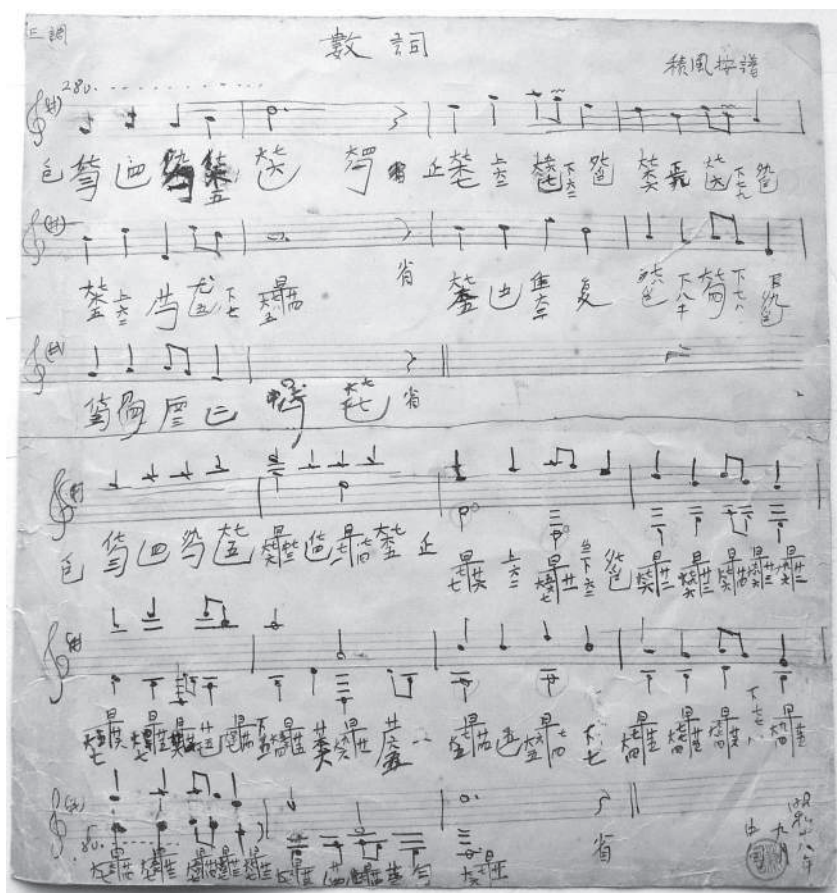
詞」の琴譜（減字譜に五線譜を併記したもの一枚）には、「積風按譜」「昭和十八年九月中旬」と記した上で自身の印を捺してある。林が一九四三年に、既存の楽曲（未詳。数え歌のようなものか）を琴の曲に編曲・記譜（按譜）したものであろう（図3）。無題琴譜（減字譜に数字譜を併記したものと五線譜を併記したものと計二枚）の方は、「昭和十八年八月廿三日作」と記してあり、こちらは同年に作曲したものとみられる。

「数詞」も無題琴譜も小曲ではあるものの、譜の内容を見ると、琴の多様な指法を使用して、ハーモニックス・ポルタメント・複音奏法などを取り入れた琴の音楽の特性を活かした楽曲となっていることが見て取れる。林謙三が琴の音楽そのものや奏法についても会得していたという、彼の多才さが窺えよう。

三、高羅佩との再会と交流、及び琴に 関する更なる調査研究（戦後）

戦後、林謙三は東京から奈良に移り、正倉院の楽器の調査研究に尽力して、一九五〇年には「東洋古代音楽の研究と正倉院古楽器の復元」をもって朝日賞を受

図3：林謙三按譜 琴譜「数詞」



賞する。その他にも、五絃琵琶譜、敦煌琵琶譜、催馬楽等の多くの研究を進めたが、⁽³⁹⁾琴の調査研究も続けており、琴の製作や修復なども行っていた。また高羅佩との交遊も続いていたのである。

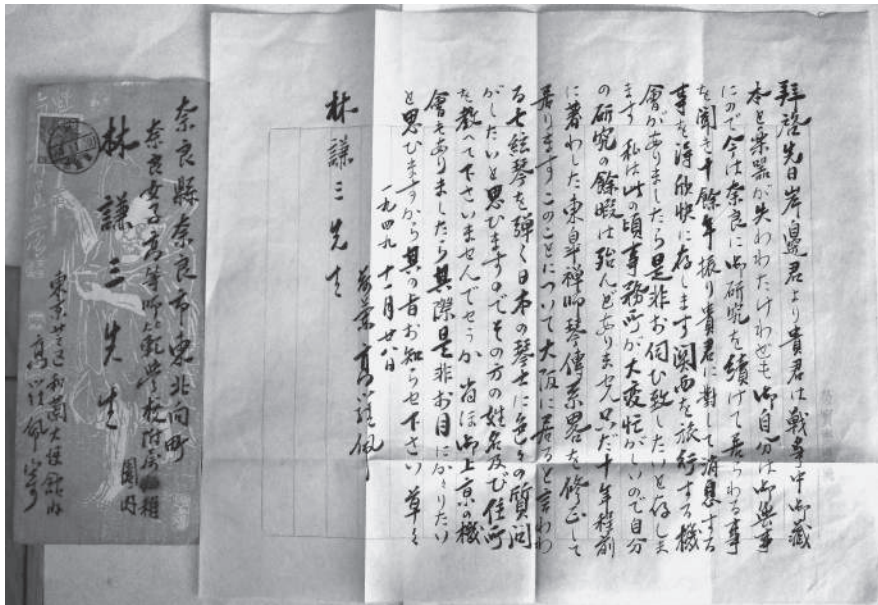
本章では、書簡を含む林謙三旧蔵資料に基づいて、先に、高羅佩との戦後の再会と交流に関する事項を明らかにした上で、次に、林謙三が戦後に行つた琴の調査研究等について紹介する。

(一) 高羅佩との再会とその後の琴をめぐる交遊

高羅佩は一九四二年に日本を離れ、一九四三年には中国の重慶でオランダ大使館の一等書記官に着任した。重慶で高羅佩は中国の琴家たちと交流し、更に琴学を深めたことが知られるが、ちなみに、彼が特に親しく交遊した中国の琴家は、本稿第四章で取り上げる査阜西であつたという。また高羅佩は、日本で集めた資料(特に東臯心越に関するもの)をまとめた著作『明末義僧 東臯禅師集刊』を、一九四四年に重慶の商務印書館から出版している。⁽⁴⁰⁾

そして、一九四八年十一月に、オランダ駐日軍事代表団の政治顧問として東京に戻つた来た高羅佩は、早速翌年二月には日本の友人達を自宅に招待しており、その招待客を記した文書中には林謙三の名も含まれていた。⁽⁴¹⁾ただし、林謙三は東京を離れ奈良に移住していたため、この招待は林に届かなかつたのではないかと推測される。⁽⁴²⁾その後、高羅佩は岸辺成雄から林謙三の居所を教えられて、一九四九年十一月に、奈良の林に宛てて便りを送つたことが、現存する書簡から明らかである(図4)。以下、その書簡全文を載せる。

図4：高羅佩の林謙三宛て書簡 (1949年11月28日付)



拜啓 先日岸邊君より、貴君は戦争中御藏本と樂器が失われたけれども御自分は御無事マツマに、今は奈良に御研究を續けて居られる事を聞き、十餘年振り貴君に對して消息する事を得、欣快に存じます。關西を旅行する機會がありましたら、是非お伺ひ致したいと存じます。私は此の頃事務所が大變忙がしいので、自分の研究の餘暇は殆んどありません。只だ十年程前に著わした東皐禪師琴傳系略を修正して居ります。このことについて、大阪に居ると言われる七絃琴を弾く日本の琴士に色々の質問がしたいと思ひますので、その方の姓名及び住所を教へて下さいませんか。

尙ほ御上京の機會もありましたら、其際是非お目にかかりたいと思ひますから、其の旨お知らせ下さい。

草々

一九四九 十一月廿八日

荷蘭 高羅佩

林謙三先生⁽⁴³⁾

なお、右の書簡で「十年程前に著わした東皐禪師琴傳系略」というのは、高羅佩が一九三七年に発表した論文「Chinese Literary Music and its Introduction into Japan」に附載する「琴学伝授略系」や、一九四〇年に刊行した著書『琴道』に載せた系譜「Historical table of the traditional of the Chinese Lute in Japan」とその解説、更にそれを中国語にして著書『東皐禪師集刊』に収載した「東皐琴学東伝系略」を指すものとみられる。⁽⁴⁴⁾ それらを修正しているという高羅佩が、林謙三に調査の協力を求めていることが注目されよう。詳しくは後述するが、この後、彼らは再会の機會を得て、互いに資料や情報を提供し合っていたことが、林謙三旧蔵資料中から窺い知れるのである。

さて、高羅佩は前掲の書簡から一箇月も経たないうちに關西を訪れ、林謙三と再会した。一九四九年十二月十六日消印の高羅佩からの葉書には、次のように見える。

拜啓 お手紙有難御座いました。

私は来る廿日より廿五日迄京都の洛陽ホテルに居りますから、その内に奈良にお伺ひ致します。京都到着以後早速聯絡します。別便にて拙著『東皐禪師集刊』一冊お送り致します。その本に⁽⁴⁵⁾東皐琴傳系略に對し、御教示を戴きたいです。

草々

高羅佩⁽⁴⁵⁾

また、林謙三の自筆年譜における一九四九年十二月の項には、「二十二日 高羅佩一家来訪、法隆寺に案内」とあり、彼らが奈良で再会できたことが確認できる。その際、おそらく琴の研究の話をしたり資料を渡したりしたのだろう。例えば、本稿第二章で取り上げた林謙三手写本『玉堂琴譜抄』によると、この十二月二十二日に、家蔵の『玉堂琴譜』刊本を高羅佩に貸したことが知られる。なお余談であるが、この『玉堂琴譜』刊本は、そのまま戻って来なかったようであり、⁽⁴⁶⁾現在オランダのライデン大学が所蔵する高羅佩の旧蔵書中に、当該刊本が存するとみられる。⁽⁴⁷⁾更に、時期は不詳であるが、高羅佩の方も、自筆の琴譜『普庵呪』一冊(図5)を林謙三に貸したものの、林謙三も借りたまま返しそびれたようである。というのも、その高羅佩自筆本と、林謙三が一九五三年にこれをそっくりに写した手写本(図6)が、林謙三旧蔵資料中に今なお残されているのが確認できたからである。⁽⁴⁸⁾林は書写した後に高羅佩に返すつもりであったと思われるが、その機会がなかったであろうか。『玉堂琴譜』にしても、『普庵呪』にしても、互いに借りたままであったという結果はさておき、これらの事例からは、彼らが資料を提供し合い、研究の進展のために協力し合っていたことが窺えよう。

ところで、一九五〇年に林謙三が朝日賞の授賞式のために上京した際、高羅佩は次のような葉書を送り、授賞式翌日の一月十五日に林謙三を自宅に招いて祝いの席を設けたのであった。⁽⁴⁹⁾

拜啓 お手紙有難御座いました。尊台には日頃の御研究に基き榮譽たる朝日文化賞をお受けに相成り、受賞の爲め御上京に相成る由、就ては右慶祝旁々午餐を呈上致したいと考えますので、来る十五日(日曜日)午前十一時頃拙宅(目黒区駒場町八六〇番地、前田邸の前、U. S. ハウス一〇九五)に御來駕お願い申したいと存じますが、如何でしょうか。御案内申し上げます。事務所の電話43四一四一、自宅の電話46三四四〇。他は何れ御拜眉の上。

高羅佩⁽⁵⁰⁾

この後、高羅佩は一九五一年末頃には日本を離れ、林謙三と高羅佩は一九五〇年以来会う機会はなかったようである。⁽⁵¹⁾ただし、便りは途絶えておらず、一九五六年にレバノンのベイルートにいた高羅佩から林謙三に次のような手紙が届いている。

図5：林謙三旧蔵、高羅佩自筆『普庵呪』（表紙、琴譜の冒頭）

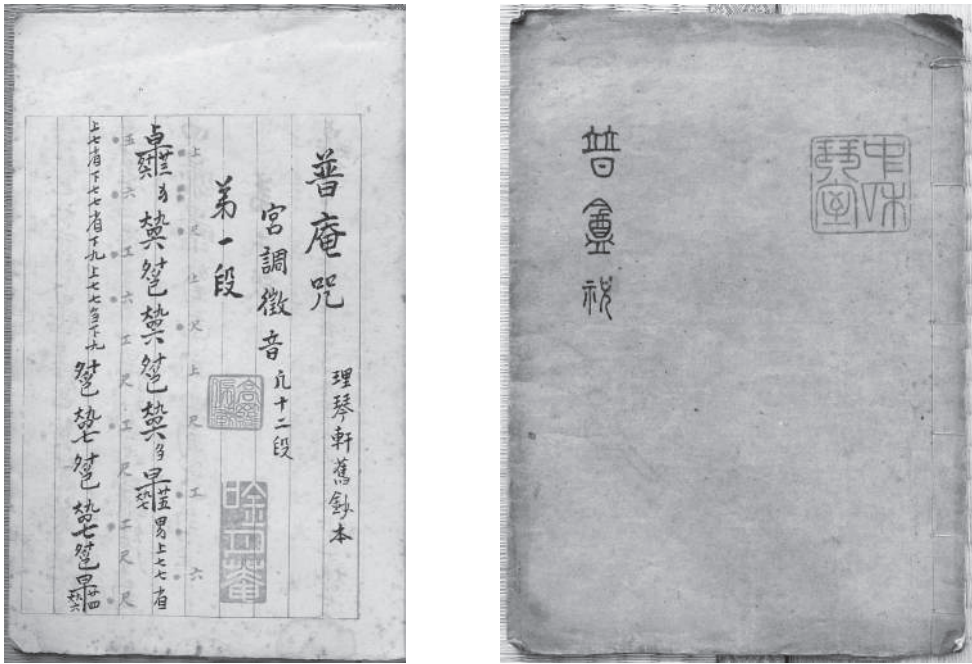
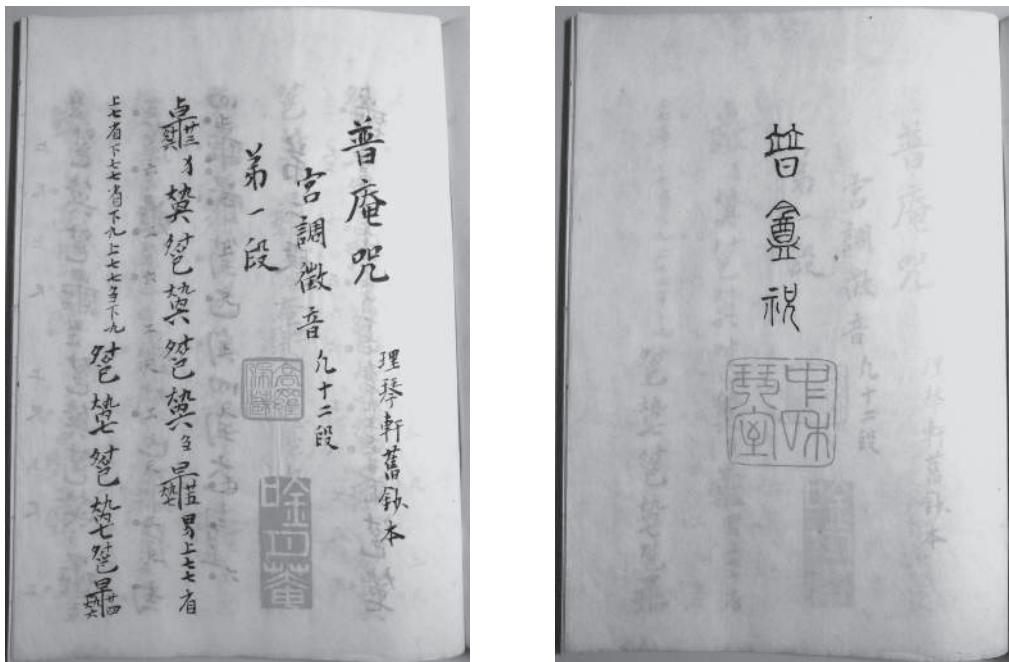


図6：高羅佩自筆『普庵呪』の林謙三手写本（表紙、琴譜の冒頭）



拜啓 永く御無沙汰致しまして誠に申し譯御座いません。今は貴著「敦煌琵琶譜の研究」を頂くと早速お禮申し上げます。

貴方と御家族は如何でせうか。今は奈良大學にどちらの科にお務めですか。お暇の際に何か御消息を教へて下さい。

私は三年を渡たつてオランダの外務省に中東司々長をして、今回在リバノン兼シーリヤ和蘭公使としてペイルート迄派遣されて、今年六月に妻と子供を携へてここに到着した。昔し式 大きな官邸を見付けまして、私の本を皆整理しました。オランダに家、大變小さかつた。本と骨董品はその時にその儘に箱にしまつて置いた。リバノンは住み宜しところです。氣候は東京と殆んど同じ。只だ冬はそんなに寒くない。

私は久しぶり日本語手紙を書いて、まづい文章を御免下さいませ。

草々

ペイルートに

九月八日

高羅佩⁽³²⁾

この手紙に対する林謙三の返信の下書きが旧蔵資料中に残されていたので、それを要約して紹介すると、次のとおりである。⁽³³⁾

- ・ 一九五〇年以来、お目に掛かっておりませんが、お子様たちもご成長されたことでしょう。
- ・ 公余に琴を弾く時間はありませんか。
- ・ 私も座右に琴を一張掛けていますが、多忙につき、絃に触れることは稀です。
- ・ 最近中国では、古楽譜『幽蘭』の解説研究が勃興して、琴家たちが各々意見を出して議論しています。これと共に、私が以前紹介したことのある『琴用指法』影写本に記載された唐代の趙耶利等の琴の手法書が、吟味されようとしています。
- ・ 近年、妻鹿友樵（関西で東臯心越系統の琴学を伝え広めた人）の末裔の方と懇意になり、友樵の『三友草蘆記』に記す遺愛の三琴「江月」「寥天遊」「霜天鈴鐸」と他の四琴、及び遺墨と文房等を見せて頂きました。

このような事柄が記してあり、久しぶりの便りにおいても、林謙三は高羅佩に琴に関する報告をしていたことが知られよう。

なお、高羅佩は一九六五年に駐日大使となつてまた東京に戻つて来るが、二年後には病のため帰国し、一九六七年九月に亡くなった。高羅

佩の最後の日本滞在中に彼らが交わした手紙類は、今のところ見つかっていないため、彼らの交遊についての紹介は、以上で筆を擱くことにするが、ここまで本稿に紹介した事項だけでも、林謙三と高羅佩の琴をめぐるつながりが如何に深かったかが、明らかになったのではなからうか。

(二) 琴に関する更なる調査研究、論考の執筆、及び楽器の製作と修復

戦後、林謙三が行った琴に関する調査研究、論考の執筆、及び楽器の製作と修復等については、以下のものが挙げられる。ただし、中国の琴家・研究者との交流において行った事項は、次章にまとめて取り上げるので、それらは除く。

○一九四七年十月十八・二十三日 初めて正倉院の宝庫に入り、これより正倉院楽器の調査研究を始める。古琴（七絃琴）については、北倉内にて「金銀平文琴」一張と、銀平脱合子内に納められた琴絃などの残欠物を実見・調査する。⁽⁵⁵⁾

○一九四九年二月 小型の七絃琴を自ら製作する。その琴底（琴の裏）には「小雅」の銘を刻し、龍池（裏面の腹部に開けられた共鳴孔）内には「新造僞琴。昭和己丑二月／於和州平城寓居、斲之。積風」と墨書する。⁽⁵⁶⁾

○一九五三年 家蔵の古楽器の琴を修復するため、五月二十二日、琴軫（各絃を留めて絃の張りを調節するための部品）七個を赤樫で製作し、七月三日には、琴軫と絃を繋ぐ紐（絨釦）を試作する。同月九日、この琴の拓を採る。⁽⁵⁷⁾

○一九五三年七月十二日 高羅佩自筆の琴譜『普庵呪』（理琴軒旧鈔本）を書写する⁽⁵⁸⁾（前掲の図5・6参照）。

○一九五四年十一月十五日 正倉院の「金銀平文琴」の銘を調査する。⁽⁵⁹⁾

○一九五五年五月十九日 法隆寺伝存の七絃琴（現在東京国立博物館所蔵で、江戸期に「開元琴」「雷琴」などと称された琴）について、各部分の寸法や状態を調査する。⁽⁶⁰⁾

○一九五〇～一九五六年 未発表著作『天平の音楽を探る』（一九五〇年十月成書、一九五六年九月訂補、未刊）を執筆し、その中で琴に関する文章（正倉院の金銀平文琴、法隆寺伝存の琴と鈴木蘭園著『雷琴記』、『幽蘭』琴譜について）も執筆する。⁽⁶¹⁾

○一九五五年十一月二十三日 幕末から明治の関西で琴学を伝え広めた妻鹿友樵（一八二六～一八九六）の遺愛の琴七張その他について、そ

これらの保管先まで訪問して詳しく調査し、友樵の著述等を含む琴関係の資料も書写する。また十二月二日には妻鹿家を訪問する。⁽⁶²⁾ なお、林謙三は、この件については高羅佩に書簡で報告していた(本稿の本章(一)参照)。

○一九五七年十一月十二月 一九四五年に出版取りやめとなった未刊の単著『東亜楽器考』を訂補し、中国に送る。本書は中国語に翻訳され、一九六二年二月に中国北京の音楽出版社から刊行されたが、その中に、琴に関する論考「古琴瑣説」を載せる。⁽⁶³⁾

○一九五八年 妻鹿友樵の琴の弟子であった小畑松坡の長男であり、且つ東卓心越琴系の最後の琴家であった小畑治良(松雲、一八七七―一九五九)の弟小畑三郎から、小畑家所蔵の琴の資料(永田聰泉写本『琴譜』三冊、大江玄圃著『琴学入門』一冊、中国刊本の『琴学入門』三冊、松井友石著『談琴』上下二冊)を借り、十二月二十一日に松井友石著『談琴』上下二冊(自筆稿本)を書写する。⁽⁶⁴⁾

○一九五九年十二月刊行の平凡社『音楽事典』第二巻の中で、「琴」及び「琴楽」(1. 中国、2. 日本の七絃琴)の項目を執筆する。⁽⁶⁵⁾

○一九六〇年九月 未発表原稿「招提寺東塔遺材の琴」を執筆し、家蔵の日本天保年間作の琴について、その来歴と、この琴をめぐる当時の琴家たちについて明らかにした。⁽⁶⁶⁾

○一九六四年六月刊行の単著『正倉院楽器の研究』の中に、正倉院の「金銀平文琴」に関する論考を載せる。⁽⁶⁷⁾

○一九六七年十月刊行の共著『正倉院の楽器』においても、琴及び「金銀平文琴」について言及する。⁽⁶⁸⁾

○一九六八年十月に論考「日本古楽譜展望」を発表し、その中の「1. 最古の琴譜 幽蘭譜と琴手法」にて、琴譜『幽蘭』と吉川英史所蔵『琴手法』(『琴用指法』) 影写本の内容を紹介する。⁽⁶⁹⁾

○一九七三年一月発行の『当道』第二十一号にて、随筆「七絃琴をめぐる」を著す。⁽⁷⁰⁾

○一九七三年三月刊行の単著『東アジア楽器考』(中国で一九六二年に出版された『東亜楽器考』の増補校訂版)中に、琴に関する論考「古琴瑣説(琴制の発達・琴の最古の図像・唐代古琴の特徴)」、及び「正倉院に存する楽器資料(三) 絃楽器 1. 琴」を載せる。⁽⁷¹⁾

林謙三は、右に挙げた最後の事項(一九七三年の『東アジア楽器考』刊行)から三年後の一九七六年に亡くなった。戦後、琴を主題として取り上げた論文の公刊はなかったものの、最後まで琴に関する調査研究等を行っていたことが、右の各事項から知られよう。

四、中央音楽学院民族音楽研究所の人々、及び查阜西ら中国の琴家・研究者との交流

二十年以上前のことではあるが、筆者は以前、中国北京にある中央音楽学院の查阜西記念室において、林謙三が吉川英史所蔵『琴用指法』影写本を転写した手写本一軸が所蔵されているのを見たことがあった。また、同じく北京にある中国芸術研究院音楽研究所の図書館では、日本の琴に関する写本のマイクロフィルムが数点所蔵されており、そのうち二点については、目録の書誌事項に、林謙三の写本または影写本に拠り撮影したもの、と記録されているのを見たことがあった。⁽⁷³⁾ その時は、なぜ林謙三の手写本や林によるマイクロフィルムが中国に存するか、不思議に思ったものである。というのも、林謙三については、戦前に中国から日本に亡命していた郭沫若との交友は知られているものの、⁽⁷³⁾ 林自身は一度も中国に行ったことはなく、琴をめぐって中国との交流があったという話は、聞いたことがなかったからである。

右に挙げた查阜西記念室の查阜西（一八九五―一九七六）とは、著名な古琴の研究者・演奏家で、中央音楽学院民族音楽研究所研究員、中国音楽家協会副主席等を務め、中国全土における古琴の資料や伝承を調査・整理し、『存見古琴曲譜輯覧』、『存見古琴指法譜字輯覧』、『琴曲集成』等を編纂して、古琴の伝承と研究に多大な貢献を残した人である。ところで、查阜西の論文集『查阜西琴学文萃』には、查阜西が来日時に林謙三と一緒にいるところを撮影した写真一枚が掲載されている。しかしながら本書中には、二人の交流について述べた文章は無く、查阜西に関する研究書や伝記においても、管見では、これまで林謙三の名を見たことはない。⁽⁷⁴⁾ また、岸辺成雄著『江戸時代の琴士物語』を始めとする日本の琴に関する書籍や論文にも、林謙三が查阜西を含む中国の古琴関係の人々と交遊があったというような話は無く、筆者にとつては、古琴をめぐる林謙三と中国との接点については、長らく謎であった。

ところが、このたび林謙三旧蔵資料の調査によって、林が一九五〇年代半ばから、中国の中央音楽学院民族音楽研究所（のち中国音楽研究所、現在は中国芸術研究院音楽研究所）の人々と頻りに書簡を交わし、研究資料を送り合っていたこと、また查阜西とも琴の研究と資料をめぐって交流があったことを知った。そして、查阜西と林謙三が日本で面会したその詳細も、明らかになったのである。つまり、筆者が以前、查阜西記念室や音楽研究所で目にした林謙三に由来する資料は、林自身が送ったものであることもわかり、謎が解けたわけである。ただし中国では、林謙三と查阜西らの交流の後に文化大革命が始まり、古琴の研究においても、學術文化の国際交流においても、困難な時期が到来したことから、彼らの交遊は忘却されてしまったのではなからうか。

なお、今回の林謙三旧蔵資料の調査では、古琴に関すること以外にも、中国の研究者と林謙三の交流の事跡が多く明らかにしたが、本稿では、古琴をめぐる交流の事跡のみを紹介する。時系列により各事項を挙げると、次のとおりである。

(一) 中央音楽学院民族音楽研究所の楊蔭瀏・李元慶、及び欧陽予倩との交流

○一九五四年

中国では、中央音楽学院民族音楽研究所の查阜西の主導で『幽蘭』の研究が進められることになり、特に、各地の琴家たちによる「打譜」(復元演奏)についての討論が始まる。その研究の経緯や成果をまとめた查阜西編『幽蘭研究実録』第一輯に、林謙三の論文「琴書三題」が紹介され、同第二輯には「琴書三題」の中国語訳が掲載される。ただし、この時はまだ查阜西と林謙三の間に交流はなく、查阜西は「琴書三題」については、友人が科学院で入手したものと述べている。⁽⁷⁵⁾

○一九五五年

林謙三は、楊蔭瀏著『中国音楽史綱』(上海、万葉書店、一九五二年)中に、自身の著作『隋唐燕楽調研究』が言及されていることを知り⁽⁷⁶⁾、七月頃、当時中央音楽学院民族音楽研究所副所長であった楊蔭瀏に手紙を送る⁽⁷⁷⁾。その後、楊蔭瀏から返信(一九五五年九月十二日付)があり(図7)、以後、楊蔭瀏を含む民族音楽研究所の人々と林謙三の間で、主に書簡による交流が始まる。

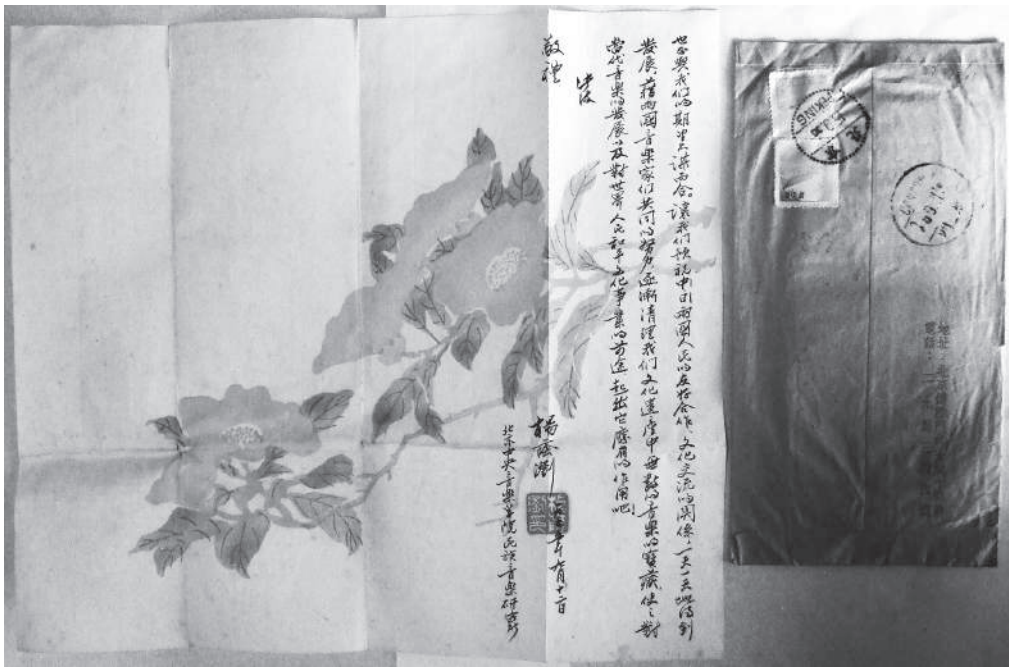
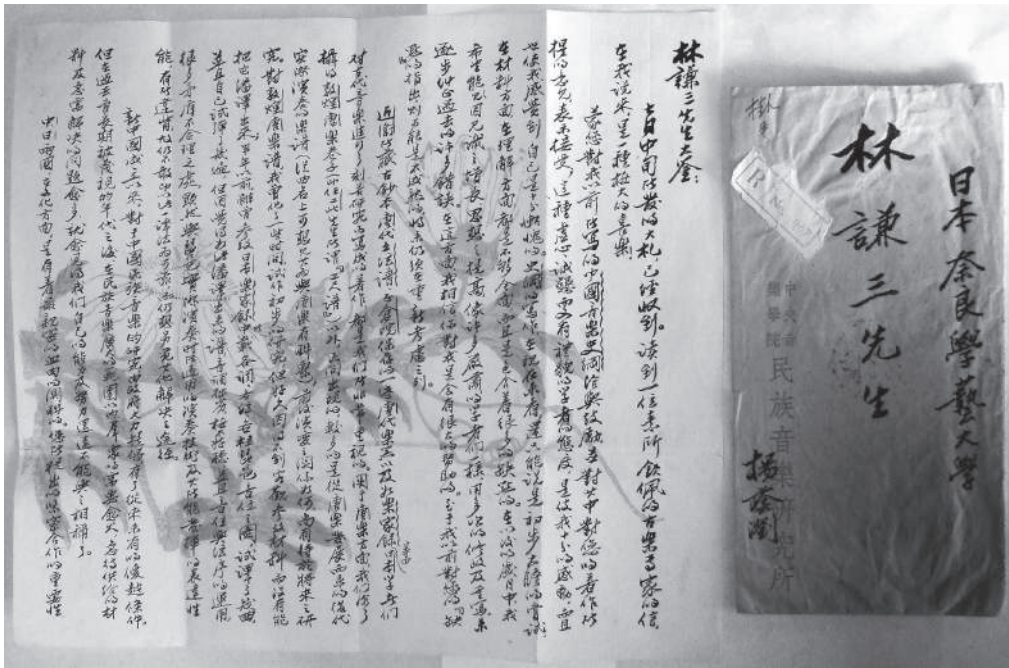
○一九五六年

五月に、戦後初めて中国から京劇代表团が日本に公演に訪れる。これに随行して来日した副団長の欧陽予倩(一八八九〜一九六二)は、事前に民族音楽研究所副所長の李元慶(一九一四〜一九七九)から、林謙三宛ての書簡と同研究所からの寄贈本十三冊を託されて持ってきており、来日後、林に連絡を取る。六月二十六日、その書簡と寄贈本が林の元に届き、七月三日、林謙三は大阪公演に来た欧陽予倩と大阪のホテルで会談し、李元慶宛ての礼状を託した。⁽⁷⁸⁾

七月十五日、林はまた欧陽予倩と李元慶に今回の件の礼状を出し、それと共に、自身の論考と日本の音楽資料の写真数点を送った。その中には、『琴用指法』影写本の写真フィルムも含まれており、これについて林は、「今日わが国でも稀観書の一つで」と説明している。⁽⁷⁹⁾

十月、李元慶から、先の林謙三の手紙と資料に対する礼状、及び民族音楽研究所の出版物十五冊が届く。なお、七月に欧陽予倩と林謙三が

図7：楊蔭瀏の林謙三宛て書簡（1955年9月12日付）



会談した際、林は自身の未刊著作『東亜楽器考』の原稿を渡した
らしく、この李元慶からの書簡では、本書を中国で出版する話が
提案された。⁽⁸⁰⁾ これら一連の出来事に関する新聞記事が残るので、
図8に載せる。(なお、この記事では、「東亜楽器考」を「東洋楽
器考」と誤っており、上段十一行目の「十六冊」は正しくは「十
五冊」とみられる。)⁽⁸¹⁾

○一九五七年

四月初旬に、日本婦人中共視察団が中国を訪問することにな
る。そこで林謙三は、自身が用意した日本の音楽資料およそ三十
八点(マイクロフィルム三十六種、青焼写真二種)とその目録、
及び自身の論文二点を、民族音楽研究所の李元慶に届けてもらう
よう、視察団奈良県代表の坂口氏に託す。それらの資料の中に
は、『琴手法書』(『琴用指法』影写本)の青焼写真も含まれて
いた。⁽⁸²⁾

その時のものとみられる新聞記事が存するので、図9に載せ
る。(なお、この記事の三段目第七〜八行に「琴書三代」とある
のは正しくは「琴書三題」であり、四段目第十五行の「欧陽余
債」は正しくは「欧陽予倩」である。また、五段目第十一行に
「フィルム十五本」とあるが、林謙三の書簡下書きと李元慶から
の礼状⁽⁸³⁾によると、林が託したマイクロフィルムは前述のとおり三
十六本である。)この新聞記事には、坂口氏出発前の三月二十八

図8：昭和31年（1956）10月23日の朝日新聞より

1956年10月23日 火曜日 第XXXX号

中共で出版申入れ

東洋古典音楽通じ結ぶ友情

朝日文化賞 林教授研究の「楽器考」



林謙三教授
音楽研究

の権威である奈良女子大学教授林謙三氏(左)奈良市法蓮町の自宅へ、中共の中央音楽院民族音楽研究所から、このほど最新刊の中国音楽の研究「解語書十六冊と古今楽譜対照表」などが送られて来た。これには同研究所副所長李元慶氏の手紙も添えられ、林教授が十数年も苦心して書きあげた「東亜楽器考」を出版したいというて来ており、国交が絶えている日中兩國間に共通の東洋音楽を通じて固い友情が結ばれようとしている。

同教授は古代(わ) (琵琶) や琴の研究で有名で、去る二十四年には正倉院の古楽器復元で朝日文化賞を受け、大々 離解だった古代のびわや琴の楽譜を数多く近代の楽譜にして発表している。その中のいくつかが同研究所に伝わったらしく、李元慶

副所長からの最初の便りは、去る六月来日した際の欧陽予倩副団長の手を通じて突然届けられた。これには「中国古代のびわ譜を訳したものがあつたら送つてほしい。ゆらん(幽蘭)譜の原譜を知っているそうだが、どんなものか」などと書き添えていた。

そこで同教授は、ゆらん譜を写したマイクロフィルムなどのほか参考資料として「東洋楽器考」の原稿を欧陽副団長にと手付た。今度送られて来たのはその返事だが中国に伝わる古代楽譜の解説である「見在古琴曲解題」や各地方の民謡を集録したものなど、中共では研究所関係者にだけしか配布しないわずか二百部の限定出版本まで含まれ、同教授の研究にとつても貴重なものばかり。とくに七弦琴の最古の楽譜(約十三百年前)といわれるゆらん譜の研究には非常に力を入れているらしく、「幽蘭研究表紙」という厚い本にまとめられていることが注目される。また出版したいと希望して来ている「東洋楽器考」は、東洋独

得の楽器の構造や弾き方を記したものが、日本では採算がとれぬというので出版をあきらめていたもの。同教授は、大喜びで迅速新しい研究を書き加え、一部を中国向きに書き直して、今年中に原稿の副本を送ることとしている。

林教授の話 中共では民族音楽を育てるのに政府が非常に力を入れている。最近も各地方の音楽指導員約四百人を集めて会議が開かれ、席上地方民謡が約七百曲も披露されたといつて来ている。民族音楽研究所が古典音楽にこたない力を入れているのは、きつと古いものを新しい民族音楽に生かして行こうという 温古知新の気持ちからで、費いことを思ふ。私でもできるだけ協力します。

かた 秋深し
とどろきは何の事故か泣く
——道 族
(福井・さし)

中共へ東洋古典音楽の資料

林教授苦心の研究

婦人視察 団県代表 坂口さんに託して

きたる七日羽田を出発、香港から中共入りする日本婦人中共視察団の一人、県代表の奈良市宝来町、坂口いとしさん(まご)は奈良学大林謙三教授が苦心してつくった東洋古典音楽の資料を北京郊外の中央音楽院内中国民族音楽研究所へ届



けることになり、二十八日奈良市法蓮北町の林教授を名媛長子さん(まご)にも訪れ資料の説明を受け打合せを行った。林教授は三十二年未開拓の東洋音楽に取組む古典音楽学者で中国から日本に伝った唐、明の音楽を中心に楽器の復元や楽譜の起しなどに没頭、最近では正育院楽器のレプリカの復元を手をこめるなどかすかの業績を残している。研究の一つである琴書三代(昭和十七年発表)が戦後の昭和二十九年同研究所の研究資料で紹介され中共にセンセーショ

ンを巻き起した。林氏の話によると中共も祖先から綿々と語り伝えられている民族音楽の系譜を研究、民族色豊かな旋律と音楽の心を現在の中共音楽に生かそうとしているというところが興味の絶えぬなかつた中国の歴史のため日本に伝わりながら中共から姿を消してしまつた貴重な音楽資料も数多く、林教授が坂口さんに託して届ける琴手法書などもこのすたれた貴重な資料の一つ。昨年未だ日した京劇一行の副団長歐陽余儀氏(中国国立演劇大学長)が民族研究所の李元慶副所長に頼まれて林氏を訪ね、資料の提供を求めるとともに同教授の研究の一つ『東亜楽器考』の中共出版をすすめた。こうして昨年十一月から本格的準備にこりかかつた林教授は一千枚にのぼる『楽器考』の原稿をほとんど書き上げ、いま三百枚近くの縮刷折込の検写原稿の仕上げに余念がない。七日の出発までにこの原稿は完成しないのであとで送り届けることだし、研究所がもっとも欲しがっている唐音和解音曲、魏氏楽譜、明楽八調など十五、六冊の楽理楽器の古版本のフィルム十五本と『琴手法書』などを坂口さんに託すことになったもの。

戦前十年ばかり上海にいた坂口女史は、これで訪中の素晴らしいおみやげができたこと大いに感謝林教授も、学者同士が資料を提供するのは当然のこと、これが日中友好のきずきになれば幸いだ」と語っていた。

日に、林が氏に託す資料の説明をしている時の写真が見える。非常に多くの資料を用意して贈ったことが知られよう。

(二) 查阜西との交流

○一九五八年五月

四〇五月、中国から中国歌舞団が来日し、日本各地で公演を行う。歌舞団には、当時中央音楽学院民族音楽研究所研究員であった查阜西が、古典音楽顧問・七絃琴（古琴）演奏者として随行していた。林謙三は、歌舞団の呂驥团长から、五月二日の大阪毎日ホールでの公演招待券を受け、公演を見に行く。この日の公演で查阜西は、琴と簫の合奏「平沙落雁」における琴の独奏を行った。⁽⁸⁴⁾

五月七日、歌舞団は奈良見物に訪れ、林謙三はそこで查阜西と対面・会談する。この時の二人の面会の様子については、一九五八年五月八日の毎日新聞奈良県版に取り上げられており（図10）、次のように紹介されていた。⁽⁸⁵⁾

来日公演で好評の中国歌舞団呂驥团长ら六十余名が、神戸公演を終わり福岡公演に向う余暇をさいて七日、若葉の目にしみる奈良公園を訪れ、楽しい一日をすごした。（中略）

はしゃぐ団員の中に、年ばいの白髪の団員が林謙三奈良学大教授と固い握手を交わして何か専門的な話をしているのが人目をひいた。查阜西という中国の弾琴の第一人者であり、また琴の研究家としても有名な人。

林教授は上代楽譜の研究、正倉院楽器の調査などで有名な人。林教授がかつて唐代の琴譜「幽蘭琴譜」や琴手法書（琴をひくためのテキスト）として有名な唐の趙耶利が書いたものなどを研究発表したことがある。これが中国で出版され中国の古書であるにもかかわらず、原本が中国になく古い写本が日本に残っていることを知った查阜西氏が来日を機に林教授に会い琴譜の研究についての意見を聞きたいと念願していたのが実現したもの。古代東洋音楽を通じての友情の一コマだった。

この記事（図10）に載せる下の写真には、林謙三（右）と查阜西（左）が映っている。なお、先に本稿の本章冒頭で、『查阜西琴学文萃』中に查阜西が林謙三と一緒に映った写真が掲載されていると述べたが、その写真（図11）も、同じく五月七日に二人が奈良で会談した際に

撮ったものであることが、このたびの林謙三旧蔵資料の調査により確認できたことを附言しておく。

○一九五八年六月

五月の対面後、林謙三は、查阜西に贈るための日本の琴学資料三種のマイクロフィルムと解説文を用意し、訪中する日本舞踊団（团长花柳徳兵衛）に随行する毎日新聞社の山本氏に託して、查阜西に届けてもらう⁽⁸⁶⁾。資料に同封したとみられる林謙三の查阜西宛て書簡の下書きが残っているので、ここに全文を紹介する。

查阜西先生

一別以来、已に一月余を経過いたしました、御元気に益々斯道に御精励のことと拝察いたします。

さて今度、日本舞踊使節団の貴国訪問を機に、架蔵の日本琴学関係の書三種の複写フィルム五巻と解説文を、右団に随行の毎日新聞社、山本鋒次郎氏に持参して頂くことにいたしましたから、どうぞお受取り下さい。此等は、中国琴学の傍系として一時開花した日本琴学の一面を語る好ずの資料でありますので、御参考にもなればと思つて、お贈りいたしました。

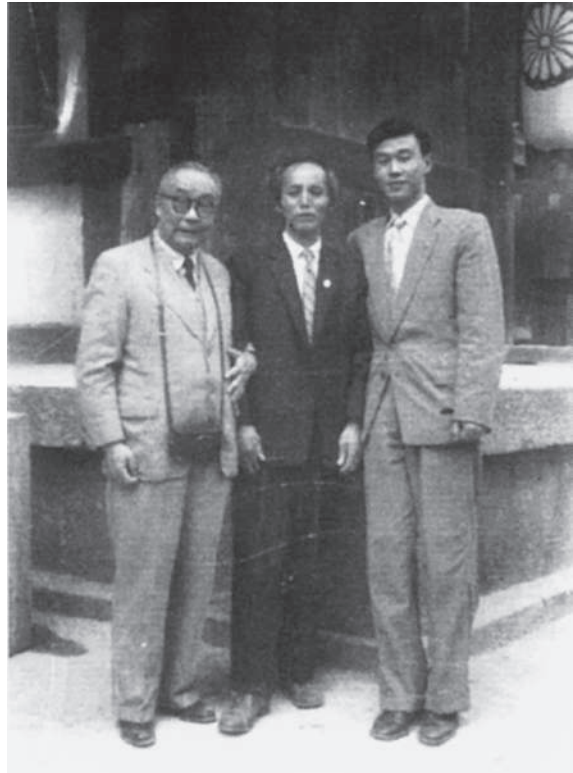
尚、神光院の幽蘭琴譜の写真撮影は、外遊中の京都博物館長の帰朝後に相談して実現したい考えであります。

一九五八年六月十一日

林謙三⁽⁸⁷⁾

右の書簡末尾に、琴譜『幽蘭』について言及しているのが注目される。先の五月七日に二人が奈良で会った際、日本に現存する『幽蘭』原本（神光院の所蔵であったが、当時は京都博物館で修理・保管中）の話題が出たのであろう。中国ではまだ『幽蘭』の原本を見ることができ

図11：查阜西 [左] と林謙三 [中央] の写真（『查阜西琴学文萃』（中国美術学院出版社、1995年）より転載）



ず、一八八四年刊行の『古逸叢書』に収載の『幽蘭』影写本の影刻が研究に使われていたことから、おそらく林謙三は查阜西に原本の写真を送りたいと考え、京都博物館に掛け合っていたものとみられる。

しかし残念ながら、この話は林謙三存命中には実現せず、中国で一九六三年に刊行された『琴曲集成』第一輯上冊（中央音楽学院中国音楽研究所・北京古琴研究会編。各琴譜の底本の解題は查阜西による）収載の琴譜『幽蘭』は、依然として『古逸叢書』収載のものが使用されていた。当時、音楽研究所の楊蔭瀏と李元慶は、早速この『琴曲集成』第一輯上冊を林謙三に贈ったようで、これを受け取った林の礼状の下書きには、「碣石調幽蘭に就きましては、先年末、京都神光院本の写真複製刊行の企画を聞いておりますが、まだ具体化しておりません。一日も早くの実現を切望しております。」⁽⁸⁹⁾と述べている。

なお、林謙三が前掲の書簡下書き（一九五八年六月十一日付）で、查阜西に贈ると述べていた「架蔵の日本琴学関係の書三種の複写ファイル五巻と解説文」とは、具体的にどのようなものであったか不詳である。ただし、これに対する查阜西の礼状（後掲の一九五八年七月六日付書簡）、及び『查阜西琴学文萃』中に言及する日本琴学資料名から推測すると、⁽⁹⁰⁾林謙三所蔵の井上竹逸筆記『随見筆録』の複写や、林自身が作成あるいは編集したと思われる日本琴学の「琴系譜略」が含まれていたと考えられる。附言すると、本稿の本章冒頭で言及した中国芸術研究院音楽研究所（中央音楽学院民族音楽研究所の後身）所蔵の、林謙三の写本または影写本に拠り撮影したと記録のある日本琴学資料のマイクروفイルムなども、この時か、あるいは別の時期に林が查阜西に送ったものかもしれない。そうでなければ、林が民族音楽研究所の李元慶らに送ったものであろう。更に付け加えると、中央音楽学院查阜西記念室所蔵の『琴用指法』影写本の林謙三手写本一軸も、林が查阜西との交流において贈ったものであろうが、その贈った時期については未詳である。

○一九五八年七月

查阜西から林謙三に御礼の書簡（図12）と琴絃（図13）が届く⁽⁹¹⁾。琴絃は、戦時中から伝統的な絹絃の生産と供給ができなくなっていた危機的状况において、查阜西が主導し、琴家の呉景略らと蘇州の絃工方裕庭が研究して製作に成功した貴重なものであった。⁽⁹²⁾查阜西から届いた琴絃は今も残されているので、図13にその写真を載せておく。書簡（図12）の内容は、部分的に要約して日本語に訳すと次のとおりである。

図12：查阜西の林謙三宛て書簡（1958年7月6日付）

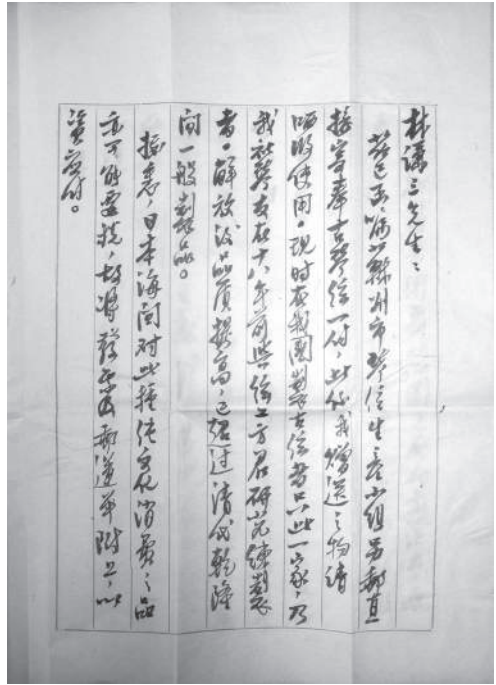
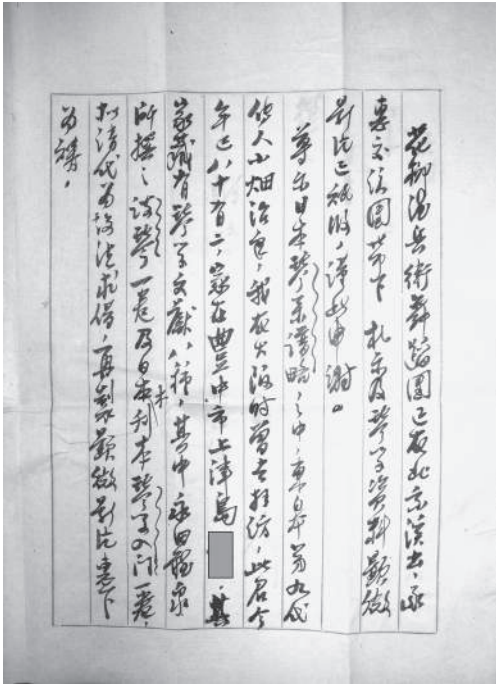
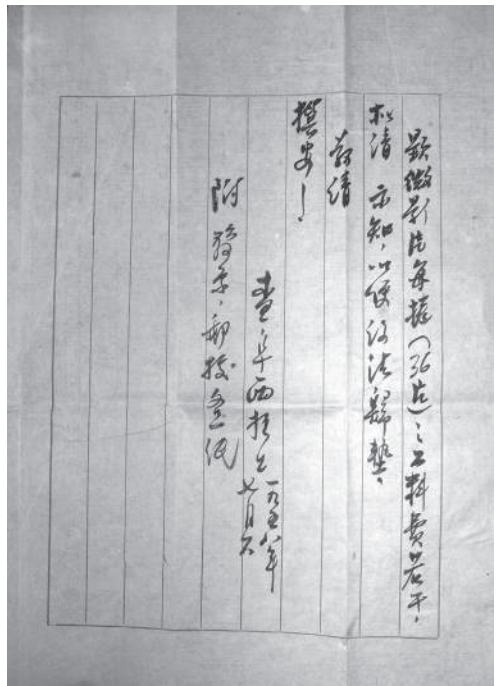


図13：查阜西から林謙三に贈られた琴絃



林謙三先生

・このたびの御礼として、蘇州の琴絃生産小組から古琴の絃一セットを直接そちらに送りました。これは、我が琴社の琴友が十八年前に絃工の方君と研究して製作したもので、解放後に質が高く、清代乾隆年間の製品よりも品質の良いものです。ご笑納ください。

・花柳徳兵衛舞踊団が北京に公演に訪れ、その団が持って来た林謙三先生の手紙と琴学資料のマイクロフィルム等を受け取りました。謹んでここに御礼申し上げます。

・ご教示くださいました日本の「琴系譜略」中に見える、東臯心越第九代伝承者の小畑治良氏については、大阪滞在中に、氏のお宅を訪問することができました。小畑氏は八十二歳で、家は豊中市上津島（省略）にありまして、そのお宅には琴学文献が八種所蔵されました。そのうち、永田マ聴泉著『談琴』及び日本刊本の『琴学入門』を私の代わりにお借りして、その複写マイクロフィルムをまた作成して頂けないでしょうか。お願い申し上げます。

一九五八年七月六日 查阜西⁽⁹³⁾

右の書簡で查阜西は、五月の関西公演で大阪に滞在中に小畑治良を訪ねることができたと述べている。本稿の前章に挙げたとおり、小畑治良（松雲）とは、妻鹿友樵の琴弟子小畑松坡の長男で、東臯心越琴系の最後の琴家であった。查阜西が小畑家を訪問した経緯は、林謙三自筆年譜や周辺の人間関係から推測するに、治良の一番末の弟で日中国交回復関西国民会議会長であった小畑忠良（一八九三〜一九七七）を通じて、実現したと思われる。⁽⁹⁴⁾

その時に撮影された写真が『查阜西琴学文萃』に見えるので、ここに転載する（図14）。弹琴する小畑治良の左横（写真上では右側）から手元を注視しているのが查阜西であり、治良の背後にいる眼鏡を掛けた人物が弟の忠良である。⁽⁹⁵⁾ ちなみに、その時、林謙三は小畑家に同行していない。この写真の注記と查阜西主編『歴代琴人伝』によると、治良が演奏したのは二曲で、一つは「秋風辞」であったという。これは東臯心越所伝の『東臯琴譜』収載の小曲で琴歌である。なお、後掲の林謙三が查阜西に宛てた一九五九年十月一日付け書簡（下書き）にも述べるように、小畑治良は翌年一月に永眠された。よって、查阜西はこの時、日本の東臯心越琴系における最後の伝承の姿を見ることができたのだとも言えよう。

○一九五八年十二月

林謙三は查阜西から頼まれた琴書を小畑家に借りに行き、十日に複写、十六日にそのマイクロフィルムを查阜西に送り、二十三日には小畑家に琴書を返しに行く。⁽⁹⁷⁾ それら琴書のマイクロフィルムを送る際に查阜西に宛てた手紙の下書きが残るので、次に載せる。

查阜西先生

先に古琴絃一包を惠贈に預り、篤く深謝いたします。併せて懇書を賜わりながら、心ならずも音信を絶つておりましたことを深くお詫び致します。当時、小生宿病の為、文筆を放棄、また御依頼の琴書の撮影も果し得ない為、今日まで御無沙汰しておりましたことをどうぞ御容謝^{ママ}下さい。

小畑松雲（治良）翁蔵の琴書中、『談琴』（松井友石撰）二冊、日本刊本『琴学入門』（大江玄圃撰）一冊のマイクロフィルム（四巻）は別便でお送り申し上げましたから、御査収下さい。

右とりあえず御案内まで。

益々御元氣に新年をお迎え下さいますようお祈り致します。

一九五八年一月二日

林謙三⁽⁹⁸⁾

図14：查阜西が小畑治良（松雲）を訪問した時の写真
（『查阜西琴学文萃』（中国美術学院出版社、1995年）より転載）



○一九五九年

林謙三は、先に訪中した日中文化交流協会の中島健蔵理事長を通じて、査阜西から贈られた『存見古琴曲譜輯覧』と画家齊白石の画集を受け取り、後日、査阜西に御礼の書簡を書く。査阜西が林謙三に贈った査阜西編纂『存見古琴曲譜輯覧』（北京、音楽出版社、一九五八年）は、今も林謙三旧蔵資料中に存し、その本には「林謙三先生教正 査阜西敬贈 一九五九 六月三日」と署名されているのが確認できた（図15）。これに対する林謙三の礼状の下書きも残っていたので、次に載せる。

査阜西先生

貴国建国十周年の嘉節に際し、心からお祝い申し上げます。本日、北京に於ける祝祭の盛儀が眼前に浮びます。

さてその後、無音信でありますが、先生には益々御元気に琴道に御精進のことと存じます。如何ですか。

先頃、訪中の日中文化交流協会の中島健蔵先生を通じて、貴稿『存見古琴曲譜輯覧』と『齊白石画集』各一冊を賜わり、あつくお礼申し上げます。大著は琴学に関心を持つ者の坐右の必備参考書であり、白石翁の画集は印刷精妙で真筆に接する感があり、共に永く愛用したいと思います。

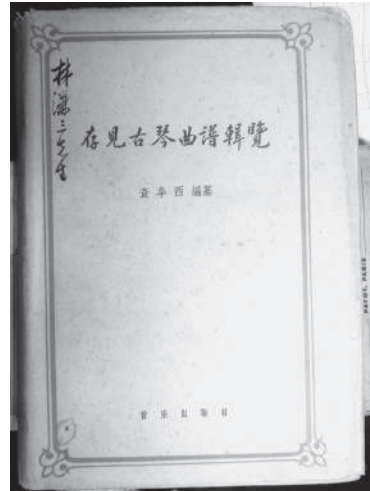
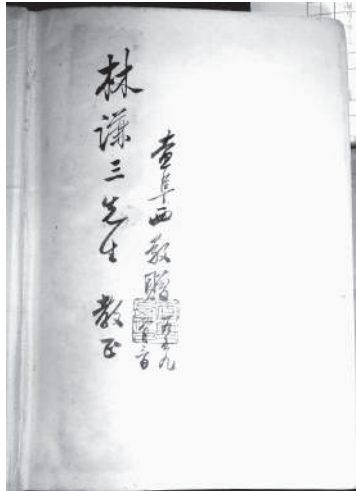
国慶節にあたり、お祝いとお礼を兼ねて御挨拶まで。

一九五九年十月一日 林謙三

昨年五月、先生が訪問されました小畑治良翁は、本年一月永眠されたとのことを、序でながらお知らせいたします。⁽¹⁰⁰⁾

林謙三の古琴研究と高羅佩 (Robert Hans van Gulik) ・ 査阜西らとの交流について

図15：査阜西から贈られた『存見古琴曲譜輯覧』（林謙三旧蔵）



林謙三旧蔵資料中から見出した、查阜西との交流が知られる書簡等の資料は、以上に尽きる。最後に載せた一九五九年十月一日の書簡下書きより後のものは、今のところ見つかっていないため、それ以降に彼らに交流があったか否かは未詳である。とは言え、本稿では林謙三旧蔵資料を精査した結果、これまで日本でも中国でも知られていなかった、琴をめぐる林謙三と查阜西、及び中央音楽学院民族音楽研究所の李元慶らとの交流の軌跡を、充分明らかにすることができたと見えよう。

最後に、彼らの交流の軌跡を辿る過程で、林謙三の貢献によるものと認められた事柄を若干述べておきたい。查阜西編纂『存見古琴指法譜字輯覽』（中国音楽研究所、一九五九年）に参照・引用されている「狍氏『琴手法』」と称する資料は、林謙三が吉川英史所蔵の『琴用指法』影写本を手写して、また青焼写真にして贈ったものである。また、本稿注（95）でも一部言及したが、『查阜西琴学文集』六九九～七〇五頁、並びに查阜西主編『歴代琴人伝』五・上、二九～三二頁の中で、東臯心越を祖とする日本の琴学の師承と、各琴人の略歴及び系図が非常に詳しく記述されているのは、その背景に、林謙三から『談琴』や『随見筆録』等の日本の琴学資料の提供や、日本の琴系譜についての情報提供がなされていたからであった。

本稿では、林謙三の蔵書・遺稿・メモ・ノート・書簡等を含む旧蔵資料の調査によって明らかになった、古琴に関する林謙三の研究の事跡と交流の軌跡、更には彼の残した貢献について、一つずつ辿りながら紹介した。古琴の分野においても全く知られていない事項を、少なからず示すことができたのではなからうか。今後、これを起点として更なる史実が掘り起こされ、関連する学術分野の研究や学術交流の進展の助となることができれば幸いである。

注

- (1) 岸辺成雄『江戸時代の琴土物語』（有隣堂印刷、二〇〇〇年、私家版、初出は「江戸時代の琴土物語 第一話」『楽道』六一八号、一九九三年）、「江戸時代の琴土物語 完結号」『楽道』六九八号、一九九九年）、稗田浩雄『修訂 近世琴学史攷』（東洋琴学研究所・梁谿山房、二〇二〇年、私家版）、坂田進一『玉堂琴譜』論攷——浦上玉堂 琴の世界（学藝書院、二〇二二年）、坂田進一「瘦蘭齋樂事異聞」第一話～第一九二話（藤樹社『月刊書道界』二〇〇四年五月～二〇二〇年五月）など参照。
- (2) 林謙三旧蔵資料中に存する本人の名刺には、自ら「ヴァン・グーリック」と表記している。

- (3) 高羅佩については、C. D. 巴克曼・H. 德弗里斯著、施輝業訳『大漢学家 高羅佩伝』（中国海口、海南出版社、二〇一一年）等に詳しい。
- (4) 高羅佩「詩夢先生ノ書道ニ就キテ」（『書苑』第二巻・第六号、一九三八年六月）三〇頁に、「私ハ一昨年ノ秋、北京ニテ……詩夢先生ヲ訪ネタ時、……ソノ時先生ハ私ニ（引用者注、古琴を）一箇月程親シク手ヲトツテ教ヘテ下サツタ。」とある。
- (5) R. H. van Gulik（高羅佩）「Chinese Literary Music and its Introduction into Japan」（『武藤教授在職三十年記念論文集』（長崎高等商業学校研究館年報 商業と経済 第一八年第一冊）長崎高等商業学校研究館、一九三七年）同『琴道 The Lore of the Chinese Lute: An Essay in Chin Ideology』（東京、上智大学、初版一九四〇年）、同『HSI K'ANG and his Poetical Essay on the Lute』（上智大学、初版一九四一年）。
- (6) 「林謙三先生年譜・業績目録」（『東洋音楽研究』第二十四・二十五号、一九六八年）一〇一頁の昭和十五年（一九四〇）の項に、「五月 高羅佩に琴を学ぶ。」とある。また林謙三旧蔵自筆年譜における同年の項に、「五月、高羅佩より「大雅」琴を贈らる。この頃より琴を学ぶ。」とあり、この記述を起点として一九四一年の項の半ばまで点線が引かれている。よって、一九四一年の半ばまで一年ほど琴を学んだのではないかと推測した。ちなみに、林謙三が高羅佩から弾琴を学んだことは知られておらず、例えば『日本音楽大事典』（平凡社、一九八九年）の「琴（きん）」の項では、「昭和の初めにいったん絶えた日本の琴道は、オランダのファン・ヒューリック（中国名高羅佩。日本駐在オランダ大使、東洋学者）が第二次世界大戦後、岸辺成雄に琴法を伝え」と述べるのみで、そこに林の名は見えない（二六五頁）。なお、岸辺成雄は終戦直後の一九四五年から二年間、高羅佩から弾琴を学んだことが知られるが（『江戸時代の琴土物語』一頁、『岸辺成雄博士記念 第一回東洋音楽史研究国際シンポジウム 唐代音楽の研究と再現 資料集』（上野学園大学日本音楽史研究所、二〇一四年）収載「岸辺成雄博士年譜」二二頁、本稿第三章（一）に後述する）とあり、高羅佩が戦後日本に赴任したのは一九四八年末であるため、それ以降のことであつたと考えられる。また、筆者は以前、岸辺氏から、林謙三氏の「琴書三題」は重要な論文であるので、しっかりと読むように、とのご教示を受けたことがあるが、林と高羅佩のことについては何も言及されなかつた。おそらく岸辺氏も、林氏が高羅佩から弾琴を習つたことは、ご存知なかつたと思われる。
- (7) 林謙三の「高羅佩 van Gulik と琴の思い出／未完／68, 81」は改行。以下同）と題する未完原稿により、漢字は常用字・新字体に統一し、数字は漢数字に改めた。なお、本稿では「前から琴に心がけて道具屋から付属品のない琴を求めたり」とも述べているが、林謙三の他の草稿「招提寺東塔遺材の琴」によると、林は早くも昭和五、六年頃には七絃琴の古楽器を探して収集していたようである（林謙三著、山寺三知解題・翻刻・校訂「七絃琴雜記 附、招提寺東塔遺材の琴」（國學院大學北海道短期大学部紀要）第四十一巻、二〇二四年）の附録参照）。
- (8) 林謙三旧蔵資料中に残っていた林の既刊論文「琴書三題」の初校原稿には、「昨年「琴道」完成の記念として著者（引用者注、高羅佩）から「大雅」と自銘自刻の天明八年造の琴一面を頂戴した。」と述べ、高羅佩が著して林に贈つた「大雅」琴の銘文を載せている。なお、この部分は校正時に削除したらしく、既刊論文には見えない。銘文については、初校原稿のほか、林の「大雅琴記」と題するメモ、及び右の初校原稿から銘文を抜き写した一九六六年六月十日のメモにも記録されている。
- (9) 前注（8）に載せた初校原稿による。読点と返り点は原稿のままである。（ ）内に加えた現代語訳は引用者（山寺）による。
- (10) 前注（8）に載せた一九六六年六月十日のメモによる。
- (11) 高羅佩「詩夢先生ノ書道ニ就キテ」三〇頁。なお、本論文三二頁第三図には、おそらく高羅佩が自身の使用のために筆写したとみられる『集義齋私譜』の一部の写真を載せる。この『集義齋私譜』をもう一部書写して林謙三に与えたのであろう。ちなみに、現在オランダのライデン大学に所蔵さ

れている高羅佩の旧蔵書中には、彼自身が書写した琴譜は、『中和琴室琴譜』が存するのみである (IDC Microform Publishers 『Van Gulik Collection』の目録、及び李美燕・高柏・雷哈諾「荷蘭高羅佩在古代中国雅文化方面的蔵書与論著」『中国文哲研究通訊』第十八卷・第三期、二〇〇八年)。よって林謙三旧蔵『集義齋私譜』は、後述する林謙三旧蔵の高羅佩自筆『普庵呪』と併せて、高羅佩研究の方面においても貴重な新出資料であると言える。

(12) 林謙三の未完原稿「高羅佩 Van Gulik の琴の思い出／未完／68.8」による。

(13) 林謙三「琴書三題」一三五頁。

(14) 林謙三の未完原稿「高羅佩 Van Gulik と琴の思い出／未完／68.8」に、「この良師をえてにわかに琴学に熱中したものである。最古の琴譜である幽蘭琴譜の名はすでに知っていたが、この譜にも私なりの解釈を下してみたいとおもい立ったのもそれからである。」とある。

(15) 詳しくは、山寺美紀子「国宝『碣石調幽蘭第五』の研究」(北海道大学出版会、二〇一二年)三三〇～三三九、六九〇～一三八頁。

(16) 『国宝』碣石調幽蘭第五』の研究』四八～五一頁、及び楊宗稷纂輯『琴学叢書』(一九一〇～一九三一年、復刻一九九八年、北京、中国書店)参照。

(17) 「昭和十五年十月二十〇日書写／林謙三」との書写奥書が見える『幽蘭古指法解 幽蘭減字譜』林謙三手書本一冊、「昭和十五年十月二十九日書写／林謙三」との書写奥書が見える『幽蘭双行譜』林謙三手書本一冊、「昭和十五年十月二十六日書写／林謙三」との書写奥書が見える『幽蘭和声』林謙三手書本一冊による。

(18) 内題に「琴左右手法 琴手法図 調琴法／徂徠」と記し、「昭和十五年十月二十八日書写了／林謙三」との書写奥書が見える林謙三手書本一冊による。

(19) 林謙三旧蔵写本一冊(外題「碣石調幽蘭譜」、書写奥書「文政六年癸未之夏 峰静軒／謄写于平安橋居」)による。

(20) 前注(19)の写本一冊に挟まれた調絃法に関する林謙三自筆メモによる。他にも、林謙三旧蔵資料中には、『幽蘭』の調絃法に関するメモが数枚存する。

(21) 林謙三は「琴書三題」二三七頁で、「幽蘭譜と共に多分同時に後水尾天皇から狛家に賜つたものかと思はれる「琴手法」と云ふ書」(すなわち本稿でいう『琴用指法』)について、「今は原本の行方が判らないが、最近圖らずも吉川英士氏の蔵書中からその影寫本一本を見出し、これによつて原本の體裁を偲ぶことが出来たのは幸である。」と述べている。これに関して附言すると、筆者の私見では、現在彦根城博物館所蔵の井伊家史料V633『琴用指弾法』一軸が、その行方知れずとされていた『琴用指法』(『琴手法』)の原本であると考えられる。一方、吉川英史所蔵『琴用指法』影写本については、筆者が以前吉川氏にお尋ねしたところ、その後の所在は不明であるとのことであった。詳しくは、『国宝』碣石調幽蘭第五』の研究』一三九～一五五頁。

(22) 「昭和十六年五月廿八日以影写本写之／林謙三」との書写奥書が見える『琴用指法』林謙三手書本(『琴手法書十三枚』と記す袋に入った薄紙十三枚にわたって模写したもの)による。

(23) 幸田親盈較正『幽蘭譜字母源流』林謙三手書本一冊による。

(24) 『長谷川生問答』林謙三手書本一冊(本奥書「右長谷川生問答／蘆屋元長謄写」、書写奥書「昭和十六年八月十四日写 林謙三」)による。

- (25) 高羅佩「琴銘の研究」(『書苑』第一卷第十号、一九三七年)一二頁に、「現在日本デ古琴ヲ彈ク者ハ六七人シカナイト云フヤウナ有様デス。」とある。
- (26) 林謙三「琴書三題」二四四頁。なお、割注の部分は「ハ」で括った。
- (27) 『絲桐説約』林謙三手写本一冊(書写奥書「昭和十六年二月二日/以幽学社舎蒐集本写之 林謙三」)、及び『琴壇雜載』林謙三手写本一冊(書写奥書「右書者絲桐説約所取也 今以幽学社舎蒐集古写本録之/昭和十六年二月二日 林謙三」)による。幽学社舎蒐集本とは、巖松堂書店の波多野重太郎が営んだ幽学社舎の収集書であろう。『琴壇雜載』の著者多紀藍溪(元徳)は幕府の奥医師で、弾琴を嗜み、琴の教授も行った。
- (28) 『随見筆録』林謙三旧蔵書、及び本書に挟まれた林のメモによる。
- (29) 林謙三旧蔵『琴譜新声』抄写本一冊による。本書は、その内容と末尾に見える朱書の識語「昔時雪堂琴師所写也。今年以漢本校之。/安政戊午首夏念四日也。竹逸令徳□」(句読点を補い、新字体に統一した。□は未詳)、及び筆跡に基づいて筆者が推測するに、井上竹逸の琴師であった雪堂(鳥海、一七八二〜一八五三)が明代の琴譜集『琴譜新声』を抄写したものであり、更に竹逸が、安政五年に中国刊本を用いて校合した内容をそこに朱筆で書き入れたものとみられる。また、松平確堂の蔵書印が見えるので、その後、竹逸から松平確堂(齊民、一八一四〜一八九一)の所蔵となったものであろう。
- (30) 「昭和十六年四月二十四日校/林謙三」との識語が見える『唐楽琴譜』林謙三旧蔵本(題簽「幽蘭譜/衣笠豪谷/自摹」)による。なお、小野田東川と伯(辻)近任が携わった日本雅楽の唐楽の琴譜とは、享保・元文年間に徳川吉宗の主導で行われた琴楽再興事業の所産である(詳しくは山田淳平・山寺美紀子「享保年間における徳川吉宗の琴楽再興——思想と実践の結節点」『日本伝統音楽研究』第二十号、二〇二三年)。
- (31) 『玉堂雜記』林謙三手写本一冊(書写奥書「昭和十六年八月九日、於帝国図書館、以今泉雄作手写本写之/林謙三」)による。今泉雄作は帝室博物館美術部長、大倉集古館館長等を務めた人で、井上竹逸の琴弟子。当該手写本は現在も国立国会図書館に所蔵される(『玉堂雜記』請求記号833.203)。
- (32) 『玉堂琴譜抄』林謙三手写本二種(以下の①②各一冊)による。①は、内題に「玉堂琴譜抄」とあり書写奥書はないが、林謙三の手写とみられるもの。②は、表紙に「玉堂琴譜抄」「天明三年序あり/寛政三年刊/催馬楽・韓神」等語・笛譜書入本」とあり、末尾に「昭和十六・十七年頃、一本によりて書写するところなり。家蔵の刊本には箏・笛譜の書入れなし。この刊本、二十四年十二月二十二日來寧の高羅佩に貸してそのまま、返らず。/昭和四十三年八月六日記」との書写奥書が見える。原稿用紙に手写し、自身の解説等のメモを書入れている。なお、『玉堂琴譜』とは、浦上玉堂が、すでに失伝した催馬楽の数曲を琴曲として再興すべく、『仁智要録』等を参照して琴譜にしたもの(詳しくは坂田進一『玉堂琴譜』論攷——浦上玉堂琴の世界)。
- (33) 東阜心越が伝えた琴曲の譜をまとめた琴譜集は、江戸期に数種が刊行されたほか、収録曲数や内容の異なる様々な写本が伝写された。これらは押し並べて『東阜琴譜』と総称される。
- (34) 林謙三の識語「以服部晦庵旧蔵琴譜二冊略々校了/昭和十六年十一月七日 林謙三」と書入の見える林謙三旧蔵『東阜琴譜』写本一冊(三十三曲収載、蔵書印「村岡良弼」)、及び『宮音 高山』林謙三手写本一冊(書写奥書「以服部晦庵旧蔵琴譜書了/昭和十六年十一月七日 林謙三」)による。服部晦庵については未詳。
- (35) 林謙三旧蔵『雷琴記』写本一冊、及び本書に挟まれた林謙三自筆の翻字メモによる。

- (36) 林謙三自筆年譜の一九四三年の項、及び林謙三旧蔵の「紀州家蔵 琴ノ銘 谷響ノ昭和十八年六月一日」、「紀州家蔵 琴 銘 冠古ノ昭和十八年六月一日」、「昭和十八年六月ノ家蔵 明琴 今泉雄作旧蔵」と記す拓本数枚による。今泉雄作については前注(31)参照。
- (37) 「林謙三先生年譜・業績目録」一〇一頁。
- (38) 『国史辞典』第三卷(富山房、一九四二年)二八九〜二九〇頁。「ママ」は引用者(山寺)による。
- (39) 「林謙三先生年譜・業績目録」による。
- (40) C. D. 巴克曼・H. 德弗里斯著、施輝業訳『大漢学家 高羅佩伝』、高羅佩編著『明末義僧 東臯禪師集刊』(重慶、商務印書館、一九四四年)、永井政之「高羅佩と東臯心越——『東臯禪師集刊』の刊行をめぐる」(『駒澤大学佛教学部研究紀要』第七十号、二〇一二年)、傅暮蓉著『劍胆琴心——查阜西琴学研究』(北京、文化芸術出版社、二〇一二年)一〇六頁など参照。
- (41) 稲畑耕一郎「ヴァン・グーリックの日本語書簡——印人松丸東魚との交遊のなかで」(『多元文化』第二号、二〇一二年)二四、三二頁によると、高羅佩の一九四九年二月十一日消印の書簡中には、十五日に友人を招待することを述べており、「御招待申上ケタル方々」の中に林謙三の名が見える。
- (42) 林謙三自筆年譜にこの招待の件が言及されていないことと、後掲の高羅佩から林謙三に宛てた一九四九年十一月二十八日付書簡から推測した。
- (43) 林謙三旧蔵、高羅佩からの一九四九年十一月二十八日付書簡により、漢字は正字・旧字体に統一し、仮名の濁点を補い、くり返し符号を文字に改め、句読点を加え、適宜改行した。署名に冠する「荷蘭」は中国語でオランダのこと。
- (44) R. H. van Gulik 「Chinese Literary Music and its Introduction into Japan」一五七〜一六〇頁、『琴道 The Lore of the Chinese Lute: An Essay in China Ideology』(一九四〇年初版)二一一〜二二四頁、『明末義僧 東臯禪師集刊』一七〜一七頁。
- (45) 林謙三旧蔵、高羅佩からの葉書(一九四九年十二月十六日消印)により、漢字は正字・旧字体に統一し、仮名の濁点を補い、句読点と『』を加え、適宜改行した。
- (46) 前注(32)に載せた『玉堂琴譜抄』林謙三手写本②の書写奥書に、「家蔵の刊本には……。この刊本、二十四年十二月二十二日来寧の高羅佩に貸してそのまゝ返らず。／昭和四十三年八月六日記」とある。
- (47) IDC Microform Publishers 『Van Gulik Collection』三五頁、及び李美燕・高柏・雷哈諾「荷蘭高羅佩在古代中国雅文化方面的蔵書与論著」一四八頁に載せる『玉堂蔵書琴譜』日本寛政三年刻本(刊本)一冊が、林謙三から借りたものと考えられる。「玉堂蔵書琴譜」と題するのは、その見返しに記す表題による。
- (48) 林謙三旧蔵、高羅佩自筆の琴譜『普庵呪』(理琴軒旧鈔本)一冊(高羅佩の印「中和琴室」「高羅佩蔵」「崙月菴」あり)、及びその林謙三手写本『普庵呪』一冊(書写奥書「昭和二十八年七月十二日以高羅佩所蔵本/書写之 林謙三」)による。
- (49) 林謙三自筆年譜、及び後掲の高羅佩からの葉書(一九五〇年一月十三日消印)による。
- (50) 林謙三旧蔵、高羅佩からの葉書(一九五〇年一月十三日消印)により、漢字を正字・旧字体に統一し、句読点を加えた。
- (51) 林謙三旧蔵、林謙三が高羅佩に宛てた書簡の下書き(一九五七年二月二日付)による。
- (52) 林謙三旧蔵、高羅佩からの一九五六年九月八日付書簡により、漢字を正字・旧字体に統一し、「」と句読点を加え、適宜改行した。
- (53) 前注(51)に同じ。

- (54) 『妻鹿友樵伝』（妻鹿友一編集発行、一九八〇年、私家版）をまとめられた妻鹿友一氏のことであろう。
- (55) 林謙三自筆年譜、及び「正倉院楽器見聞備忘図／昭和二十二年十月十八日、二十三日」と題する林謙三自筆ノート（二冊）の記録による。なお、この時、林は、後に自身が音律測定用の器と推定して「七絃準」と名付けて復元した、七絃楽器残欠物二点についても調査したが、この七絃準は古琴（七絃琴）とは異なるものであるため、本稿では、これに関する林の研究については取り上げない。
- (56) 林謙三自作の七絃琴による。この琴は七絃十三徽を備えるが、外観は長方形を呈し、通常の琴より小型である。
- (57) 林謙三自筆年譜による。
- (58) 前注（48）に同じ。
- (59) 林謙三旧蔵、「法隆寺開元琴部分スケッチ在中／平文琴銘／昭和二十九年十一月十五日調査」と題する袋に入った、正倉院「金銀平文琴」の銘に關するメモ（昭和二十九年十一月十五日調査）と記す）による。
- (60) 林謙三旧蔵、「法隆寺開元琴部分スケッチ在中／平文琴銘／昭和二十九年十一月十五日調査」と題する袋に入った、法隆寺伝存「開元琴」のスケッチ（昭和三十年五月十九日）と記す）による。
- (61) 林謙三自筆草稿『天平の音楽を探る』、及び自筆年譜による。
- (62) 「妻鹿友樵遺愛品」と題する林謙三自筆ノートの記録（一頁目に「昭和三十年十一月二十三日 小槻村岡橋清左衛門邸にて調査せし妻鹿友樵遺愛琴七張その他」と記す）、林謙三自筆年譜、及び本稿の本章（二）で紹介した林謙三の高羅佩宛書簡の下書き（一九五七年二月二日付）による。
- (63) 林謙三著『東亜楽器考』（北京、音楽出版社、一九六二年）一三六～一四三頁、及び「林謙三先生年譜・業績目録」、林謙三自筆年譜などによる。
- (64) 林謙三旧蔵の『琴学入門』中国清代刊本三冊に挟まっていた小畑三郎氏の林謙三（長屋先生）宛て書簡一枚（日付不明）、及び松井友石著『談琴』を写真した林謙三自筆ノート（表紙「松井友石／談琴」、書写奥書「昭和三十三年十二月二十一日／以友石翁自筆本書写し／謙三」）による。なお、永田聴泉は妻鹿友樵の琴弟子で、松井友石は友樵の実子である。大江玄圃著『琴学入門』は天明七年か文政十一年の刊本であろう。
- (65) 『音楽事典』第二卷（平凡社、一九五九年十二月）七九三～七九六頁参照。その他、七九六頁の「琴学大意抄」や九一六頁の「碓石調幽蘭譜」、及び第三卷二〇三頁の「東臯琴譜」など、琴に関連する幾つかの項目は、執筆者の名が見えないものの、それらも林謙三の執筆であった可能性が高いと思われる。
- (66) 林謙三の自筆草稿「招提寺東塔遺材の琴」による。この草稿については、林謙三著、山寺三知解題・翻刻・校訂「七絃琴雑記 附、招提寺東塔遺材の琴」の附録に解題と全文を載せているので、そちらを参照されたい。
- (67) 林謙三著『正倉院楽器の研究』（風間書房、一九六四年）三〇～三三頁。
- (68) 正倉院事務所編集『正倉院の楽器』（日本経済新聞社、一九六七年）所収林謙三著「奈良時代の音楽と正倉院楽器」一八六頁、及び林謙三・岸辺成雄・瀧邊一・芝祐泰共著「正倉院楽器の調査研究」一七～二〇頁。
- (69) 林謙三著「日本古楽譜展望」（NHK交響楽団「フィルハーモニー」第四十卷第九号、一九六八年十月、六～一五頁）。なお、この論考は『日本と世界の楽譜』（日本放送出版協会、一九七四年）に再録された。
- (70) 林謙三著「七絃琴をめぐる」（当道音楽会『当道』第二十一号、二頁）。

- (71) 林謙三著『東アジア楽器考』(カワイ楽譜、一九七三年)一五四～一六二、七四〇～七四一頁。
- (72) 『幽蘭譜字母源流』(目録に「据日本林謙三日本幸田親盈校正抄本撮制十片」と見える)、及び『琴用指法一卷』(目録に「作者待査、据日本林謙三影抄本撮制二十八片」と見える)。
- (73) 郭沫若(一八九二～一九七八)は林謙三の著作『隋唐燕楽調研究』を中国語訳して、一九三六年に上海の商務印書館から出版した。これについては、山寺三知「林謙三と郭沫若——『隋唐燕楽調研究』誕生秘話」(『國學院雜誌』第一一七卷十一号、二〇一六年)、長谷部剛・山寺三知共編訳「林謙三『隋唐燕楽調研究』とその周辺」(関西大学出版部、二〇一七年)に詳しい。
- (74) 黄旭東・伊鴻書・程源敏・查克承編『查阜西琴学文萃』(中国杭州、中国美術学術出版社、一九九五年)、傅暮蓉著『劍胆琴心——查阜西琴学研究』など参照。
- (75) 『幽蘭研究実録』第一輯(北京、中央音乐学院民族音楽研究所、一九五四年編、一九五七年刊)一頁、『幽蘭研究実録』第二輯(同上)四一～四五頁による。
- (76) 『中国音楽史綱』では、林謙三の『隋唐燕楽調研究』に言及した箇所が三箇所確認できる(台湾版『中国音楽史綱』(台北、楽韻出版社、一九九六年)一七三、一八一、一八五頁参照)。
- (77) 林謙三旧蔵、楊蔭瀏宛て書簡の下書き(一九五五年七月付)による。
- (78) 林謙三旧蔵、李元慶の林謙三宛て書簡(一九五六年五月八日付)と欧陽予倩の林宛て書簡(同年六月五日付)、林の李元慶宛て書簡の下書き(一九五六年七月二日付)、及び林謙三自筆年譜による。なお、欧陽予倩と一九五六年の京劇団来日については、中里見敬「濱文庫所蔵の欧陽予倩致濱一衛書簡について」(九州大学中国文学会『中国文学論集』第三十九号、二〇一〇年)一六三～一六一頁参照。
- (79) 林謙三旧蔵、欧陽予倩及び李元慶宛て書簡の下書き(どちらも一九五六年七月十五日付)による。
- (80) 林謙三旧蔵、李元慶の林謙三宛て書簡(一九五六年九月十九日付)と林謙三自筆年譜による。
- (81) 林謙三旧蔵新聞記事切り抜きより、朝日新聞(奈良県版か)昭和三十一年十月二十三日の記事。
- (82) 林謙三旧蔵、林謙三が坂口五十四(いとし)氏に託した李元慶宛て書簡の下書き(一九五七年四月三日付)と、それに対する李元慶からの礼状(同年四月十九日付)、及びその時の新聞記事二枚(林謙三旧蔵新聞記事切り抜きより。一つはサンケイ新聞奈良県版昭和三十三年四月五日の記事とみられるが、図9に載せるもう一枚の書誌は不明。同じく奈良県版の三月末頃の記事か)による。
- (83) 前注(82)に載せた李元慶宛て書簡の下書き(一九五七年四月三日付)と李元慶からの礼状(同年四月十九日付)。
- (84) 林謙三旧蔵、一九五八年中国歌舞団来日公演のパンフレット(五月二日の招待券と林の書入のある関西公演プログラムを挟む)、及び自筆年譜による。
- (85) 林謙三旧蔵、新聞記事切り抜きより、一九五八年五月八日毎日新聞奈良県版の記事。
- (86) 林謙三旧蔵、自筆年譜、及び查阜西宛て書簡の下書き(一九五八年六月十一日付)による。
- (87) 林謙三旧蔵、查阜西宛て書簡の下書き(一九五八年六月十一日付)により、漢字を常用字・新字体に統一し、句読点を補った。
- (88) 山寺美紀子『国宝『碣石調幽蘭第五』の研究』四八～五〇頁参照。

- (89) 林謙三旧蔵、楊蔭瀏・李元慶宛て書簡の下書き（一九六四年二月十三日付）により、漢字を常用字・新字体に統一し、句読点を補った。
- (90) 『查阜西琴学文萃』七〇一〜七〇五頁参照。
- (91) 林謙三旧蔵、查阜西からの書簡（一九五八年七月六日付）、及び蘇州から送られた古琴絃一箱とその受領証等による。
- (92) 『查阜西琴学文萃』三八四〜三八七頁、『劍胆琴心——查阜西琴学研究』一九八〜二〇〇頁参照。
- (93) 林謙三旧蔵、查阜西からの書簡（一九五八年七月六日付）を部分的に日本語訳して要約した。小畑家の住所は個人情報であるため省略し、図12の当該箇所も消しておいた。
- (94) 『小畑忠良を偲ぶ』（小畑亮一発行、一九八五年、私家版）等参照。
- (95) 岸辺成雄『江戸時代の琴土物語』二五六頁には、小畑家に所蔵されていた同写真（図14と同じ）を載せて、「昭和三十一年五月某日に、中国の著名琴家查阜西氏が、小畑松坡を来訪した時の記念写真である。当時、梅蘭芳を団長とする京劇団が来朝し」、「写真によると……立膝して松坡老の左手を見下しているのが永田聴泉である。」と述べるが、これは昭和三十一年京劇団（団長梅蘭芳）来日時の写真ではなく、昭和三十三年（一九五八）中国歌舞団（団長呂驥）来日時の写真である。「松坡」は正しくは「松雲（治良）」の方であり、永田聴泉（一九三七年没）ではなく弟の小畑忠良とみ間違いまいだろう。また同書二五六〜二五七頁に、「查阜西氏は、日本の琴楽に詳しく……查阜西氏の『洩勃集』（一九六一）に、三十一人の日本の琴人を収録している。その人名は、友樵の子にして、友樵の琴の同門井上竹逸の養子となった松井友石の著『談琴』に見える二十九人とほとんど同じである。查阜西氏は、『談琴』を写本で入手したに相違ない。……『查阜西琴学文萃』に収載の「清代著譜琴家的師承淵源」の「和文注琴譜」の項は、……東臯禪師^{トウソウゼンシ}以下四十三人の琴士の系図を加えてある。……查阜西氏の系図に注として付記されている全四十三人の生卒年次、略歴は、前記の『談琴』に主として據っているが、当時（一九六一）の中国人としては善く書かれてはいる。」とあるが、本稿に挙げた林謙三旧蔵の查阜西からの書簡（一九五八年七月六日付）、後掲の林謙三の查阜西宛て書簡の下書き（一九五八年十二月十六日付）、及び林謙三自筆年譜等によると、查阜西は林謙三に依頼して『談琴』のマイクロフィルムを入手したのであり、查阜西が日本の琴士の系図や略歴に詳しくなかったのは、林謙三からの資料提供があったからである。
- また、坂田進一「瘦蘭齋楽事異聞 第五十九話（繰繰一 半如一 昨夢 2 查阜西先生）」（『月刊 書道界』二〇〇九年三月）には、查阜西が「一九五八年歌舞団来日時にも江戸の琴学資料を短時間で蒐集したのである。」と述べるが、その背景には、やはり林謙三の協力があつたと言つて良いだろう。
- (96) 『歴代琴人伝』五・上（中央音楽学院中国音楽研究所・北京古琴研究会、一九六五年）三〇頁参照。
- (97) 林謙三旧蔵、查阜西宛て書簡の下書き（一九五八年十二月十六日付）、及び自筆年譜による。
- (98) 林謙三旧蔵、查阜西宛て書簡の下書き（一九五八年十二月十六日付）により、漢字を常用字・新字体に統一し、句読点を補った。
- (99) 林謙三旧蔵、查阜西宛て書簡の下書き（一九五九年十月一日付）、及び查阜西から贈られた『存見古琴曲譜輯覽』と『齊白石画集』による。なお、中島健蔵の訪中は、日本中国文化交流協会の『日中文化交流 No.716』一〇〜一一頁によると、一九五九年五月からの北京訪問のことであり、六月四日には中島が中国音楽家協会を訪れ、查阜西や楊蔭瀏らと歓談したことが知られる。その時に查阜西から林謙三に贈る本を託されたのであろう。
- (100) 林謙三旧蔵、查阜西宛て書簡の下書き（一九五九年十月一日付）により、漢字を常用字・新字体に統一し、句読点を補った。

〔付記〕

本稿は、日本学術振興会科学研究費基盤研究（C）22K00155「日本に現存する古琴（七絃琴）資料の調査・研究と解題目録・蔵書印データベースの作成」（研究代表者：山寺美紀子）、及び同基盤研究（B）21H00509「東アジア古代歌謡の文学的・音楽学的アプローチによる双方的研究」（研究代表者：長谷部剛）による研究成果の一部である。

本稿に取り上げた林謙三旧蔵資料は、今後整理を経て関西大学に移管される予定である。

〔謝辞〕

資料の調査・撮影・掲載を快くご許可下さいました長屋糺様（林謙三氏ご子息）、また、調査にご協力下さいました長谷部剛氏（関西大学教授）に、心より感謝申し上げます。